やはり俺の武偵ラブコメは間違っている。

みにぃ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年はその約束を果たすべく、ナイフを握った。

緋弾のアリアの世界に比企谷八幡他、俺ガイルのキャラクターが存在したら、という物語です。Ｉｆの世界として楽しんでもらえたらなと思います。

目次

第一話 1
第二話 5
第三話 9
第四話 17
第五話 22
第六話 28
第七話 32
第八話 37
第九話 44
第十話 49
前日譚 54
第十一話 60
第十二話 68
第十三話 74
第十四話 80
第十五話 85

第一話

東京武偵高校、レインボーブリッジの南、東京湾上に位置し、南北二キロ、東西五百メートルに及ぶ巨大な人口浮島に存在する高校である。この人工浮島（メガフロート）は、学園島などと呼ばれており、その浮島の全てが校舎というわけではなく、学生寮などのおよそ学生らしい生活をするための施設が揃っている。

今日は武偵高校の始業式、当然武偵高校の生徒である俺も本来であればもう通学路の半分は過ぎ、新学期に胸を躍らせる他の学生もちらほらと見え始めるはずだったのだが…。

――俺は今現在、チャリジャックにあっている。恐らくこんなものを経験するのは世界広しといえども俺、比企谷八幡と…、こいつだけだろう。

「なあ遠山…。」

「なんだ比企谷！何か助かる方法を見つけたのか!?」

ぜえはあと息を切らしながらも、現状を打開できる可能性に期待を寄せ、こいつ、遠山キンジは聞いてくる。しかしながらこの現状を打開する術を俺は持たない。俺が今この状況でできることはただ一つ…。

「なんで俺らこんなことになってんの…。」

「現実逃避じゃねぇか！」

そう、現実逃避である。てかこの状況でツッコんでくれるとかこいつ意外と余裕あるな。

だがまあ、現実逃避の一つもしたくなるというものだ。新学期早々こんな事件に巻き込まれ、しかも元はといえばこいつが俺に一緒に登校しようぜなどと言ってきたくせに、幼馴染の女の子とイチャコラした後、なぜか部屋でグダグダしていた結果バスに乗り遅れ、チャリで行くことになったせいである。むしろこいつに何一つ文句を言ってないことを褒めてほしい。

「お前の方は何かないのかよ。」

「さっき言ったろ!・俺に考え付くのは人のいないところに行くってくらいだ!」
息が切れているせいか、遠山はがなるように叫ぶ。この様子じゃ解決策を考える余裕もなさそうだ。
俺も再度打開策を考えるべく、周りを見渡す。まず目につくのは、後ろから俺たちの後をついてくる二台のセグウェイ。人は乗っておらず、その代わりに大きめのスピーカーと一基の自動銃座に、恐らくＵＺＩと思われる銃が据えられている。いわゆるセントリーガンのような出で立ちである。こいつらはまさに今回のチャリジャックの犯人であり、通学路を走っている俺たちに
・自転車に爆弾が仕掛けられていること。
・自転車を降りる、減速する、またはケータイなどを使用すると爆発する
ということを伝えてきた。
現在走っているのは第二グラウンド。朝ここに人がいることは全くない。…恐らく遠山は最悪爆発することも考えてここに向かったのだろう。
しかし、そのせいもあり、周りに利用できそうなものは一つも…。
ふと、隣を走っていた遠山が遠くを見ていることに気付く。視線を追ってみると…、ずいぶん小さな少女。中学生くらいだろうか。女子寮の屋上からこちらを見つめている。髪色は鮮やかなピンクで、かなり高めの位置で結んでいるツインテールだ。
このチャリジャックの犯人か?何かの実験でこのようなことをしているのだろうか。
「比企谷、あいつ…。」
遠山が信じられない、といったように話しかけてくる。
「ああ、怪しいが、とりあえずは俺たちの現状をどうにかしないと…」
そこまで言った瞬間、その少女は空中にその身を躍らせる。
「飛び降りた!?」
目を丸くして遠山は叫ぶ。何が起こっているのかわからないのだろう。俺もよくわからんが…。

少なくとも確信する。あの少女は敵ではない。恐らく彼女は俺たちを助けようとしている。武偵高の人間だ。
でもなければ、わざわざあんな行動を起こす意味がない。
「おい。」
声をかけると遠山はこちらへと顔を向ける。恐怖や期待、そしていくつもの疑問が入り混じった表情をしている。
「あいつは多分俺たちを助けるつもりだ。」
「マジかよ…！」
遠山はいまだ半信半疑といった様子で再度少女を見つめる。少女は空中でパラグライダーを開き、こちらに視線を向けている。
「だが、多分俺たち二人ともお世話になればかなり危険性は上がる。だから、お前はあいつに助けてもらえ。俺は一人なら何とか出来る。」
言って、俺は自転車の向きを海岸線へと向け、全力で漕ぎ始める。一台のセグウェイが俺の方へ向かって追走してくる。どうやら一人一台。ということらしい。
ちらと、もう一度少女の方を振り返る。
「…！……!!」
こちらに何か言っているが、すでに声が届く距離ではない。しかし少女は、こちらが何かの考えをもって分かれたことを察したのか、すぐに遠山の方へ向き直る。
他人とのコミュニケーションがこんなにうまくいくとは…。俺史上一番スマートなやりとりだったかもしれん。俺あの人と何も喋ってないけど。
ともあれ、うまくいって良かった。さっき言ったが、俺は、一人ならなんとかできる。
海岸線へ近づき、堤防が見えてくる。
…そろそろか。
ーー俺は能力を発動する。
とはいっても、火を出したり、見えない力で何かできるわけではない。
ただ、消えるのだ。

俺が乗っていた自転車も、俺自身ももう誰にも見えない。俺を追ってきたセグウェイも、今俺のことは認識できていないだろう。
そして、そんなイレギュラーが起これば犯人は何をするか、そんなのは簡単に予想できる。
当然、起爆だ。
瞬間、海が爆裂する。堤防に積まれていたテトラポットがバランスを崩し、何個かガラガラと海に沈んでいく。被害はその程度だ。
周りが水というのもあり、本来であればマンションも解体できるほどの威力がある爆弾だったらしいが、この程度の被害で抑えることができた。
後はセグウェイだが、俺が能力を発動してからは完全に機能停止したかのように動かない。放置していれば犯人のもとへ帰っていくかとも考えたが、特にそんなこともなく、五分ほど待っても動かなかったので、持っていたハンドガンで銃身を破壊しておく。タイヤも破壊しておいたので、あとで探偵科の誰かが回収してくれるだろう。
…登校、ここから徒歩かよ。

第二話

人生万事塞翁が馬というが、この考えを自分の考えとして持てる人間は少ないだろう。例えば、悲しい出来事が一つあったとしよう。それがたとえ自分の幸福につながるとしても、その出来事が起こった瞬間に感じる感情は本物だからだ。頭の中で思うことは出来ても、だからと言って感情の整理がつくわけではない。ともすれば、訪れるのかもわからない不確定な幸せよりも、目の前にある不幸を避け、幸福に縋るのが当然の判断といえる。結論を言おう。

「あたし、あいつの隣に座りたい。」

「先生、俺具合悪いんで早退します。」

もう二度と学校には来ない。

チャリジャック事件の後、俺は徒歩で登校した。事件の被害にあったことで入学式は欠席。遠山はまだ学校に近い位置だったようで、ホームルームは間に合ったらしいが、俺に関してはホームルームすらギリギリだった。

そして、その始まるや否やという状況のホームルームに来た途端、今朝の少女に俺の隣という罰ゲーム席を自ら所望してきたのだ。

登校して恐らくは一分すら経っていないと思うが、俺は教室へ来たままの格好で廊下へと引き返す。

「ちょっと！何帰ろうとしてるのよ！」

しかしその道は先の罰ゲーム少女に阻まれてしまう。

「いや、だって普通に嫌なんですけど…。」

朝遠目で見たときは分からなかったが、俺はこの少女を知っている。神崎・H・アリア。きれいな桃色の髪を二つに結んだツインテール。背は小さく、中学生、下手すれば小学生にすら見える。一年の三学期からここの強襲科に転校してきた。転校してきた後、すぐにファンクラブが結成されたという話を知り合いから聞いたことがある。が、その性格が災いし、友人らしい友人がいない、という話も有名である。いわゆるボッチだ。

まあ人が話してるの聞いただけだから本当かは知らんけど。

そしてもう一つ、彼女について俺が知っている話として、今現在記録更新中の連続犯人逮捕成功回数。八歳の頃から積み重ねてきたらしいその回数、なんと現在九十九回。しかも全て一回の襲撃でだ。規格外というほかない。まあ、それ以外はよく知らんけど。

しかしまあ、この情報だけで彼女の優秀さは十二分に伝わってくるというものだ。

そう、優秀なのだ。しかもとんでもなく。

それが…、俺にとって都合が悪い。

「第一、朝お前が助けたのは遠山の方だろ。報奨金だかなんだか知らんが、俺じゃなく遠山に請求してくれ。」

「ちょっ！お前バカ！」

今まで知らぬ存ぜぬを貫いていた遠山が声を荒げる。そしてそれがトリガーだったかのように教室は騒然とし始めた。

「はーいはーい！理子分かっちゃった！ツインテールさんとヒッキーくんとキーくんの関係性！」

ひらめいた！と言わんばかりに金髪と、フリフリに改造した制服が目立っている少女、確か峰理子とか言ったっけな。

彼女はクラスを代表するかのように手を挙げる。

峰さんは一挙手一投足のスマートさこそないが、推理を語りだす探偵のような、観衆の目を、耳を引くような、カリスマとでも言うべきだろうか。

不思議な魅力を醸し出している。

「ヒッキーくんの隣に座りたがっているツインテールさん…、そしてツインテールさんを朝助けたというキーくん…。これらから導き出される答えは一つ！」

おお…、まるで本物の探偵のようである。彼女のことをよく知らない俺でさえも、これから紡がれる彼女の言葉は恐らく今は語られていない部分までぴったりと当ててくるのだろうと、期待してしまうほど自信ありげに堂々と。

「ツインテールさんとヒッキーくん、キーくんのどろどろ三角関係なんだよ！」

…大嘘を言ってのけた。もう超嘘。純度１００％の嘘である。てか三角関係作るとしたら遠山が助けないとダメだろ。…あいつ俺と神崎が遠山を取り合ってるとか考えてねぇよな…。

「いや違う！俺と比企谷は……！」

遠山が反論を試みるがもう遅い。教室内はなぜこの三人がそのような関係性になっただとか、どっちがどれくらいの関係性まで進んでいるのかという話しかしておらず、もはやツインテールさんとヒッキーくんとキーくんの三角関係は確定事項のようだった。

この混乱に乗じて帰ろうかな…。今ほとんどの人は遠山か神崎、あるいは峰を見ている。渦中の人物とは言っても、どうやら俺に質問の矛先を向けてくる奴はいないらしい。マジで友達いなくてよかった…。

そうしみじみ思いながら俺がこっそりと教室のドアに手をかけた瞬間だった。

ズギュギュン！

恋バナ（笑）をしていた平穏な教室には到底似合わない銃声が二連続で鳴り響く。

三人の関係性を話していた男子たちも、どろどろ三角関係ストーリーの内容について語り合っていた女子たちも、実は遠山と神崎が俺を取り合っているという妄想を膨らませていた女子たちも。その誰もがその二つの銃声で静まり返った。いやこのクラスの女子腐ってるやつしかいねぇのかよ…。

そしてその銃声を鳴らした張本人、神崎・Ｈ・アリアは教室中の視線を集めながら

「れ、恋愛だなんて…、くっだらない！」

ここで少し説明をしておこう。この我らが武偵高校だが、朝の出来事や、この風景からわかるように、普通の高校とは少し違う。

元々「武偵」というのは「武装探偵」の略称である。そしてこの高校はその「武装探偵」を育成する施設なのだ。では武装探偵とは何なのか。

一言で言うなら、「何でも屋」というのが正しいだろう。仮にも探偵

であるため、当然事件の解決というのが仕事になるのだが、武偵が担当する範囲というのはとんでもなく広い。迷子の猫を探す、なんてことも仕事の範疇だし、テロリストの検挙だって武偵は担当する。
その担当範囲の広さから、全ての依頼を一人でこなすということは当然不可能。そのため、この学校ではいくつかに学科が分かれているのだが、まあそれはまた別の機会だ。
まあそんなものを養成する学校なのだから、日常的に銃火器なんかにも慣れておく必要がある。という理由により登校時の持ち物、生徒証のような感覚で拳銃と刀剣の携帯が義務付けられているのである。
そして、教室内での発砲も、また認められている。正確には「射撃場以外での発砲は必要以上にはしないこと」なのだが、まあその必要かどうかの裁定は生徒に委ねられているので、実質的にはないような校則だが…。
まあそんな理由で、恐らく神崎・H・アリアはこの場を黙らせるために必要と判断し、発砲による脅しをかけた。といったところだろう。
とはいっても教室の全員を黙らせるだけでそこまでするか普通…。そのあたりどうお考えなのかしらと神崎の方を見てみると、
「全員覚えておきなさい！そういうバカなことをいうやつには…」
羞恥と怒りで真っ赤になった顔で
「風穴開けるわよ！」
クラスの全員に殺害予告をしているところだった。

第三話

「ただいま…。」

帰ってきた遠山の挨拶で目を覚ます。時計を見ると今は午後六時。もうすぐ飯の準備をしなければいけない時間である。

「おけーり、遅かったな。」

自室から出て、飯の準備をするために台所に立つ。俺はこの男子寮で、遠山と同じ部屋に暮らしているのだが、基本的に家事は俺の仕事だ。家事といっても世間の専業主婦の方々と同じというわけではなく、朝と夜の飯は作るが、掃除などは毎日するわけではない。なんなら洗濯も億劫がってしない日もある。それくらいの緩い家事である。

「ああ…、クラスの連中がなかなか帰してくれなかったんだよ。」

神崎によるクラス全員殺害予告事件ののち、クラスの連中も流石に身の危険を感じたようで、特にそれ以降騒がれることはなかった。また、神崎はちゃんと宣言通り俺の隣の席に座ってきやがったので、ついぞバックれることは出来なかった。

まあ、クラスがそんな状態だったため、恐らくクラスの連中も質問したくても神崎が怖く、質問したいことばかりが増えていたのだろう。そのツケを払わされたのが遠山というわけだ。ちなみに、一応俺の近くにも何回か人は来た。しかし誰も俺の狸寝入りを突破するには至らず、俺の生活が普段と変わることはなかった。友達いなくて良かった。

「まあそいつは災難だったな。…今日なんか食いたいもんあるか？」

普段は冷蔵庫にあるもので適当に作るのだが、なんとなく遠山が可哀そうだったので、今日くらいはリクエストを聞いてやる。なんだか母親になった気分である。

「あー、特にないな…。何でもいいよ。」

「なんでもいいが一番困るのよね…。」

まあ食いたいもんがないならしょうがない。なんか遠山の好きなもん作ってやるか…。

「それより比企谷。」

先ほどより幾分か堅い声音で遠山が話しかけてくる。
「なんだ？夕飯よりゲーム買ってほしいのか？」
「俺はお前の息子じゃねえ！」
ふざけたやりとりの後、一息ついて遠山は話し始めた。
「朝の事件さ、あれ、誰が何の目的で起こしたと思う？」
「…さあな。さっぱり見当がつかん。犯人から何かを要求されたわけでもないが、とすると俺たちの命を奪うのが目的ってのが考えやすい。しかしそれなら、問答無用で自転車に乗った瞬間爆破してしまえばいい。だから…」
だから、恐らく犯人の目的はこの事件を「起こすこと」にある。俺たちが死のうが死ぬまいがどちらでも良かったと考えるのが自然だろう。ならば怪しむべきはこの事件の発生によってメリットを得た人物になるわけだが…。
「いないんだよなぁ、そんな奴…。」
一般的な高校ならいざ知らず、ことこの高校に限って言えば殺人未遂程度のことなんてのはちょっとした事件に過ぎない。普通の学校で言えば、誰かが給食をひっくり返した、とかその程度だ。つまり、この事件での影響力というものもほとんどない。よって、この事件を起こすほどの労力に見合うメリットを得られた人間なんてものは存在しないはずのだ。
「まあ正直俺たちが今持ってる情報が少なすぎるしな。そのうち誰かがなんか発見するだろ。」
「もしかして気付いてないのか。」
「何にだよ。」
「今回の事件、武偵殺しの模倣犯だ。」
武偵殺し。確かこの学校の周知メールで来てたな…。武偵の車などに爆弾を仕掛けて自由を奪い、マシンガン付きのラジコンで追い回して海に突き落とすとか言ったものだったはずだ。確かちょっと前に逮捕されたと聞いたから頭から抜けていた。
「確かに手口は一緒だな…。この前捕まった武偵殺しは実は濡れ衣でしたって証明のために事件を起こした…、とかなのかね？」

だがその場合、なんでそんな証明をしなければいけなかったのかという話になる。そうなると正直情報不足の現状では手詰まり。全く分からん。
「まあ、だからって犯人を特定するには至らないだろ。濡れ衣の話だって可能性だしな。」
そう告げると遠山はなにやら考え込み始めてしまった。…何か思うところがあるのだろうか。

ピンポーン

と、再度事件を考察しようとしているとインターホンが鳴る。俺には特に心当たりがないので恐らく遠山の関係者だろう。と思い遠山の方をちらと見るが、遠山は未だ思考に意識を奪われているようで、恐らくインターホンにすら気付いていない。

ピンポンピンポーン

えぇ…、なんかめっちゃ鳴らしてくるじゃん…。遠山お前借金でもしたのか…？と思いつつ仕方がないので俺が玄関を開ける。最悪遠山は売ろう。いのちだいじに。
「はい、何の用ですか。」
俺が覚悟を決めて玄関のドアを開けるとそこにいたのは身長が優に二メートルは超えていそうな巨漢…、ではなく、中学生だった。
「遅い！あたしがチャイムを鳴らしたら五秒以内に出ること！」
訂正。神崎だった。両手を腰に当て、相当お怒りのご様子…。
こいつ、神崎・H・アリアはこの前のチャリジャックから遠山を、ひいては俺を救出してくれた張本人である。
てか五秒以内とか普通に無理だろ…。
「いや誰がインターホン鳴らしたとかわかんないし…。てか何の用だよ。」
「中にキンジもいるのよね？」

こちらの言葉には耳も貸さず、当然の権利のようにトランクをコロコロ鳴らしながら部屋の中に入ってくる。どうなってんのこの子の頭の中、話通じないとかいう次元じゃないんですけど…。
「トランクを中に運んでおきなさい！ねえ、トイレはどこ？」
俺がちょっと本気で引いていると、またもや勝手に話が進んでいく。
「トイレはそこのドアだ、あと何の用だ。」
「そう、ありがと。」
マジでなんなんだこいつ…。いきなり家に押し掛けてきたかと思えばトランクを中に入れておけだのトイレを貸せだのと…。遠山がなんか言ったのか？
つーか人の家にトランク持って押し掛けるとか何しでかすつもりだよ…。もしかしてガチで遠山が報奨金の請求とか受けているのだろうか。
「どうした比企谷、今のインターホン誰だったんだ？」
リビングで騒ぎを聞きつけたらしく、いつの間にか玄関まで来ていた遠山が声をかけてくる。この様子だとどうやら遠山も神崎が来ることに心当たりはなさそうだ。
…嫌な予感が加速していく。
「…悪魔。」
「はぁ？」
何を言ってるのかわからないというように遠山は首をかしげる。
「やっぱりキンジもいたのね。」
噂をすればとでもいうべきか、トイレから出て、手を洗い終えた話題の悪魔さんが無遠慮に話しかけてくる。
遠山は何が何だかわからないというような表情だが、悪魔にとっては人間一人の感情などどこ吹く風。全く興味がないというように、肩にかかった髪を払う。そしてそのままこちらにピシッと指をさすと、
「あんたたち、あたしのドレイになりなさい！」
…何言ってんのこいつ？
ほんとに悪魔なんじゃないのこの女…。髪飾りもなんか角っぽい

し。少なくとも確実に将来の夢は悪魔とか鬼とかだろこいつ。
混乱の絶頂にたたずむ二人の少年はそして、考えることをやめた。
「ほら！さっさと飲み物くらい出しなさい！」
いつの間にかリビングのソファへと腰を下ろしていた神崎は、客人への礼儀がなってないわねとでも言いたげに不遜な態度で飲み物を要求してくる。
「コーヒー！エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！砂糖はカンナ！一分以内！」
もうなんか遠山に丸投げしてしばらくホテルとかから登校しようかな…。と、遠山の方を見るとまだ完全に機能停止していた。なんか綺麗な気を付けの姿勢である。人ってほんとに情報処理しきれなくなるとあんなふうになるんだな…。
「この家にはまずエスプレッソがねぇ。あと、砂糖も種類とか気にして買ってないからカンナとか言われてもわからん。」
とりあえずもうコーヒーなら何でも良いだろうと思い、差し当たっては俺の貯蓄のＭＡＸコーヒーを与えておく。甘すぎるとか言われるかもしれんが、もうなんか相手するのも面倒なので適当でいいだろう。
「エスプレッソもないの!?どうなってるのよこの家は！」
そう言い放ち、渋々といった様子でＭＡＸコーヒーに口を付ける。
「ん…？」
一口目は何か不思議そうな顔をしていたが、意外とお口に合ったのかごくごくと飲んでいく。てか飲み干してた。
「ふぅ…。美味しかったけど、あたしはコーヒーが飲みたいと言ったのよ。人の話はちゃんと聞きなさい。」
「それ一応コーヒー飲料だけどな。」
ブーメランすぎるだろ…。この上ＭＡＸコーヒーを不味いなどと抜かしていたら小一時間かけて論破しているところだったが、まあお気に召したのであれば良い。もう一杯くらい温めたバージョンをご馳走してやろう。
俺がウキウキでＭＡＸコーヒーを温めていると、ようやく遠山の再

起動が完了したらしく、神崎に話を聞き始める。
「なあアリア、今朝助けてもらったことには感謝してる。あと、お前を怒らせるような言動についても謝る。でも、だからってなんでここに押し掛けてくる？」
　まずはそこからだ。と遠山は話を切り、神崎の回答を待つ。
「分からないの？」
「分かるかよ。」
「あんたならとっくにわかってると思ったけど。んー…、でもそのうち思い当たるでしょ。まあいいわ。」
「いやよくねえだろ。」
　ＭＡＸコーヒーを温め終わり、テーブルに並べていると、そんな会話が聞こえたので思わず口をはさんでしまう。こいつ会話苦手すぎるでしょ。俺より会話苦手な奴始めて見たわ。
　しかしそんな言葉は天上にお住まいの神崎様のお耳に届くことはなく、話は別の話題へと移っていく。
「おなかすいた。」
　飲み物の後は飯、野生動物かこいつは。自分の欲求に素直すぎるだろ。
「なんか食べ物ないの？」
「飯を作ろうとしたらお前が来たんだ。…もうこの時間からだと、買ってきた方が早い。」
　時計は既に七時前を告げている。この時間から作るのもなんか面倒だし、買いに行くことを提案する。
「ふーん、そう、じゃあ行きましょ。」
　すると、さも当然かのように神崎は一緒に行こうとしてくる。いや別にはぶるつもりもなかったけどね？
　こいつ会話できないけど意外とコミュ力は高いのかもしれない。ならばもはやコミュ力とはいったい何なのか…。
　思考のループに入りかけていると、神崎と押し問答をしていた遠山がさらなる疑問を投げかける。
「いや待て、ここで夕食まで食べるつもりなのか？」

「当然じゃない。言ったでしょ？あたしのドレイになりなさいって。その答えをまだ聞いていないわ。」
…ダメだ、こいつとの会話は時間がかかる。時間をかけても成り立つのかわからんが、とりあえずは先に夕食を調達するべきだろう。
「なあ遠山…。」
「ああ…。コンビニ行くか…。」
ちょうど同じことを考えていたのか、観念したようにそう呟いた。そしてそんな俺たちの作戦会議を知ってか知らずか、神崎は俺たちに声をかけてくる。
「ねえ、そこって松本屋の『ももまん』売ってる？あたし、食べたいな。」
とのことなので、まあとりあえずは満場一致でコンビニへ向かうことになった。というか松本屋のももまんは松本屋にしかないと思うぞ。知らんけど。
「多分ももまん自体はあるだろ。行こうぜ。」
俺が出発を促すと、となりでいつの間にかケータイを取り出していた遠山が声をかけてくる。
「あ～、その、すまん比企谷、悪いんだが…。」
なにやら歯切れが悪い。なんだよ、告白か？だとしたら速攻で断るし学校側に言って部屋も変えてもらおう。そして最終的に神崎をその部屋に押し付けて俺は平穏な暮らしを享受する。
「めちゃくちゃ白雪からメール来てた。つか電話も。多分このままだと寮まで来ちまうから、ちょっと会って話してくる。二人で行ってきてくれ。」
「いや無理、不可能、却下。てかわざわざ顔合わせる必要ないでしょ。」
余裕でお断りさせてもらう。俺一人でこいつのご機嫌取りながら夕食の買い出しとか冗談じゃない。
「白雪が会って話すって言って聞かないんだよ…。白雪のことだ。俺らの部屋にアリアにいるのがばれたら絶対にめんどくさいことになる…。」
確かに。白雪さん、大して話したことはないが、俺が遠山の夕飯を作ってるって言っただけでめっちゃ質問された。しかもなんか闇の

オーラみたいのを纏いながら。「普段何を作っているんですか？」とか「栄養バランスは考えていますか？」とか。多分あれはヤンデレとかメンヘラとかの類だと思う。普通にめっちゃ怖かったし、出来れば二度と関わりたくないと思った。
「…了解だ。ただ、そっちはそっちでちゃんと説得しといてくれ。絶対に。」
俺あの人怖いから会いたくないし。
「ああ、任せろ。…でもお前ほんとに白雪のこと嫌いだよな。」
「嫌いなんじゃなくて怖いんだよ。あの人お前のこと好きすぎでしょ。何あれ？生まれたときに刷り込みでもしたの？」
「いや、別にそんなことは…」
「何もたもたしてるの!?早くいくわよ！」
俺たちが話していると腹ペコ怪獣カンザキが腕を上下にぶんぶんさせながらこちらを呼ぶ。どうやらもう空腹が限界のご様子。
「へいへい…。」
今行きますよと答えながら神崎のもとへ向かう。どうやら神崎も話はなんとなく聞いていたらしく、特に何も聞かれることはなく、
俺たちは、夜の町へ繰り出していった。

第四話

既に時刻は七時を回り、夕食時。放課後まで遊んでいた学生の姿は、外にはほとんどない。三月と言えど、この時期は日中ですらまだ寒さが残る。それが夜ともなればなおさら。外気は冷え、制服一枚ではまだ十二分に寒いと言えるだろう。

「ヘクチッ」

まさしくそんな外気に体温を奪われたらしく、制服一枚の神崎がくしゃみをする。

「…なんで制服だけで出てきちゃったの、お前。」

「う、うるさい！こんなに寒いと思わなかったのよ！」

神崎の住んでいたイギリスは世界では珍しく、日本と同じような四季が存在する国だ。そのため季節感の違いはそこまでないはずなのだが…。さてはこいつ空腹に気とられて着込むの忘れてたな…。

「…寒いならこれ着とけ。」

とりあえずは神崎に俺が着ていたコートを渡しておく。ちょっと…、というかかなりサイズに差があるが、着れないことはないだろう。

「…ありがと。意外と紳士なのね。」

相当寒かったのだろうか、意外にも神崎は素直に受け取る。しかもお礼とかいうオプション付き。

俺はその賛辞に、深い肯定を返す。

「よく気付いたな。俺は紳士なんだ。女子に告白して振られ、そのことをその女子がいたグループにネタにされて、果ては教室中の笑いものにされたが、仕返しの一つもしなかったからな。」

小学校時代の淡い記憶がよみがえる。あの時は本気で死のうか迷ったし、二度と学校には来ないと思った。義務教育じゃなかったら間違いなく行かなくなってた。

「それは紳士じゃなくて瀕死っていうのよ。それに、紳士っていうのは自称しない物よ。覚えておきなさい。」

なにやらちょっとうまいことを言われてしまった。どうやら神崎自身もそう思ったらしくちょっと自慢げな表情をしている。

こいつマジで日本語うまいな。とてもイギリスにいたとは思えん。発音も完璧だし。
「♪～」
俺がちょっと本気で関心していると、だいぶ寒さが緩和されたのか、神崎は鼻歌なんか歌いながら先を歩き始める。ぶかぶかのコートも相まって、その姿はとても年相応、というか背格好と合っており、まるで本当に小、中学生ほどの無邪気な少女のように思えた。
「ねえハチマン。」
「なんだよ。」
「やっぱりあたしのパーティに入りなさい。あんたとは、うまくやれそうな気がする。」
「は？いやパーティの話とか聞いてないんですけど。」
「言ったでしょ？あたしのドレイになりなさいって。」
「それ全然意味違うんですけど…。」
うん。やはりこいつは帰国子女だ。ドレイ＝パーティに入ること、なんて勘違い、少なくとも在日日本人の方々はしない。…いや、俺が知らないだけでイギリスではパーティに入ることを奴隷になると表現する可能性もある。うん。絶対ないな。
…まあなんにせよ、俺はパーティを組まないし、組めない。俺は一人だ。そうするべき、理由がある。
「…もし、万が一うまくやれたとしてもパーティは無理だ。実力差がありすぎる。俺は強襲科きっての落ちこぼれだぞ。大体、本当にうまくやれるかの保証だってない。もっと言えば、俺はパーティに入ろうという意欲も、入ることで得られるメリットもない。」
強襲科、本来は銃や刀剣などを筆頭に、様々な武装を使用した近接戦による強襲逮捕を想定した授業を行う、俺や神崎が属している科だ。
その強襲科で、俺は毎回ワースト争いをしている。拳銃などに限れば一年の頃からドベを誰かに譲ったことがない。本来は、というのは、俺は銃を使用する授業には、他の生徒の命に関わるという理由で出させてもらえず、主に刀剣で先生と組手じみたことをやらされてい

る。そのため俺はほぼ銃の授業は受けていない。いやまあ、銃以外もドベ争いしてるけどね。
「あんたが落ちこぼれ？」
神崎は意外そうな顔でこちらを見つめる。
「ああ、落ちこぼれだ。俺は強襲科の中だとワースト争い常連なんだよ。単位だって危うい。」
俺が自嘲気味にそう告げると、神崎は、少しの間考えるような仕草を取っていたが、すぐに、閃いた！と言った様子で、こちらに真っ直ぐ指をさしてくる。
「じゃあ、条件を出すわ！」
「え？いや、別に条件付けても問題は解決しないんですけど…。」
ていうかじゃあって何、それ前の話題と関係がある話題の時しか使わない接続詞だよ？今の話条件出してどうにかなる話だったっけ？
しかし、俺の言葉なぞ聞こえていないかのように神崎はこう告げる。
「あんたが本気を出さない理由。あたしが当てる。当たったらあたしのパーティに入りなさい。外れるか、本当にあんたがただの落ちこぼれだった場合、今後一切あんたをパーティに誘うようなことはしないわ。」
何言ってんだこいつ…。正直少し混乱する。俺が本気を出していないということもなぜか神崎の中では確定しているらしく、神崎はやけに自信たっぷりだ。当たったかどうかでパーティに入るか決まるならば、俺のさじ加減一つで正否を決められるというのに…。
…いや、何か確実に口を割る方法に心当たりがあるとしてこの条件を出している可能性もあるか。まだ警戒はしておくべきかもしれない。
「いや、だから言ってるけどな、俺は今のままで全力だ。本気を出さない理由も何もないんだよ。あと、さっきも言ったがそんな条件つけても俺とお前の実力差が埋まるわけじゃない。その条件は、色々破綻してる。」
色々の部分を少し強調する。

この条件は俺一人に正否が委ねられていることを神崎自身わかっており、何か口を割らせる方法を持っているのか、はたまた、ただ単に神崎が気付いていないのか。

その如何によってはこの条件を飲むかどうかが大きく変わる。俺はわずかな表情の変化も見逃すまいと、神崎を見つめる。

「本当にハチマンが本気を出しているなら、調べられても問題ない。でしょ？」

神崎は、完璧でしょ？この作戦、みたいな目でこちらを見つめ返してくる。その表情は純粋そのもの。全くの悪意を感じない。いや、多少の悪意自体は感じるが、それは、嵌めてやったというような、いたずらっ子程度のかわいいものだ。これから嵌めてやる、というような詐欺師の顔ではない。てかもうただのドヤ顔だ。

いや、ならもう、いいか。最悪神崎が俺の身辺もろとも全て正しい情報を持ってきたところで、俺が間違いだと一蹴すれば、それでこの話は終わりになるのだ。それ以降俺は誘われることはなくなる。

「まあ、分かったよ。好きにしてくれ。ただ捜査期間は決めておく。…二週間くらいでいいか？」

神崎のその表情に毒気を抜かれた俺は、不自然にならない程度に抵抗して、その条件を受け入れる。

「それで十分よ。」

もしかしてこいつ意外と知略的な面は甘いのか？全く気付く様子がない…。

まあ、気付かないことに関してはありがたい。この様子だと、このまま期間の二週間が過ぎればそのまま俺は解放されそうだ。神崎のおつむが小さめでよかった…。

神崎は、そんな俺の思惑には全く気付かず、ホクホク笑顔で、スキップなんかしながらコンビニへ向かい始める。

その背中は、やはり年相応の少女のようで、さもすれば、彼女が武偵であることを忘れてしまうほどだった。

…だからだろうか、彼女がなぜこの武偵高校に入ったのか、不思議に思う。彼女は俺とは違い、常に強襲科でトップの成績を取り続け、

武偵たらんと努力する。一人で突き進んでいくその様は、あるいはそのまま壁にぶつかれば自らが壊れる、弾丸のようにも思えた。
それは、過去の自分を見ているようで、俺は思わずその背中から目を逸らす。しかし胸の痛みは、戒めるかのようにいつまでもそこにとどまり続ける。
彼女を武偵たらしめているものを、俺はまだ知らない。

第五話

「いや買いすぎでしょ…。」
　コンビニへ向かった帰り、俺は神崎の持っているビニール袋を見て、思わずそう呟いた。
　単に飯の量が多いというわけではない。量も多いが、そのビニール袋のすべてがももまんで満たされているのだ。
「つーかなんで『ももまん』限定なわけ？宗教上の理由？」
「美味しいからに決まってるじゃない。」
「いや、いくら美味いっつってもお前…。」
　美味いものは脂肪と糖でできている。とはよく言ったもので、世の中うまい事だけで生きていける訳ではないのだ。逆説的に、口に苦い良薬ばかり噛みしめてきた俺は、とんでもなく健康的な人間ということになる。脂肪と糖摂れてないけど。
「ていうか、そんなに好きならあんまんも買ったらよかったんじゃないの？」
「分かってないわね。あんまんは可愛くないじゃない。」
　ほ～ん、こいつ意外とかわいいとか気にするんだな。もっとわがままキリングマシーンみたいなやつだと思っていたが。
「あと量。買いすぎな。何日分だよそれ。」
　俺がビニール袋を指さしてそう言うと、少し恥ずかしくなったのか、神崎は少し顔を赤くする。
「きょ、今日一日くらい良いじゃない！腹が減っては戦は出来ぬとも言うし、武偵たるもの常に戦える状態を保っておくべきよ！」
「戦える状態っていうならもっと栄養面のこと考えるべきだと思いますけどね…。」
　俺がそう言うと、神崎はうるさいうるさいと駄々をこね始めてしまう。今度こういう機会があったらちゃんとした弁当を買わせよう…。
「そ、そういえばハチマン。」
　一通り駄々をこね終わった神崎は、場を仕切りなおすように咳ばらいをする。

「キンジの力について、何か知ってる？」
話を変えるため、咄嗟に出てきた話題かと思っていたが、どうやら元から聞く予定だった話がまだ残っていたらしい。
「いや、何も。」
特に語れることもないので端的にそう告げると、神崎はこちらに向き直り、話を続ける。
「じゃああいつについて教えて。趣味とか、友人関係とか、なんでもいいわ。」
「つってもな…。」
確かに俺と遠山は去年から同じ寮で暮らしており、他人よりは一緒にいる時間が長いかもしれない。だが、互いに他人と大きく関わるタイプではなかったため、身の上話のようなものは全くと言っていいほどしたことがない。相手は入試S評価、しかも入試担当の先生を倒す、とかいう出鱈目な伝説を作った男だ。興味がないといえば嘘にはなるが、まあ、それまでだ。
他人に踏み込んでほしくない領域というのは誰にだって存在する。俺はその領域に踏み込むほど無遠慮な人間ではない。あいつは自分自身についての話はほぼしない。なら、俺が聞くべき理由もない。
「お前が聞きたいような話は俺も聞いてねえよ。聞くなら自分で聞いてくれ。」
「本当に何でもいいのよ。どんなところにヒントが隠されているのかは分からないわ。」
「…大体、俺があいつのことを勝手に話すってのも無責任すぎる話だ。何か知ってても話してるかはわかんねーよ。それが重要なことならなおさらな。」
「…あんたたち仲良いのね。」
「仲良いならもっとお互い知り合ってるだろ。」
「わたしはそうは思わないわ。…ほら、鍵開けなさいよ。」
俺は言われたままに寮の部屋の鍵を開ける。それを後ろに立って眺める神崎は、何か遠いものを見ているような目で、こちらを見つめていた。

家に入ると、遠山は先に帰っており、パソコンでメールのチェックなどをしていた。
「たでーま。」
「おけーり。」
こいつたまに意味わからん位鈍い時あるから少し心配だったが、どうやら白雪との一件は滞りなく解決したらしい。
「お前が何食いたいか聞いてなかったから適当に二つ買ってきた。好きな方選べ。お前が選ばなかった方食うわ。」
そう言って俺はテーブルにハンバーグ弁当とかつ丼を置く。夕食にしては多少遅めであったせいか、コンビニに残されてた弁当自体がこの二つしかなかった。神崎がももまんオンリーとかいう狂気の食卓を選んでいなかったら俺の夕食がももまんじゃないにしても、ピザまんとかになっていたのかもしれない。もしや神崎は気を使って今日の夕食をももまんオンリーで済ませようとしているのでは…。
そう思い神崎に目を向けると、既にテーブルについてビニール袋から取り出したももまんを頬張っているところだった。ふにゅうー、などと息を漏らしながら、頬に手を当ててうっとりしている。
…どうやら気を使われたとかは気にしなくて良さそうですね。あれは完全に好みでやっている。間違いない。
「…そういえばアリア、ドレイってなんなんだよ。どういう意味だ。」
一足遅く食卓についた遠山が、神崎に質問を投げかける。
「奴隷ってのは人でありながら他人に所有物とされる人間のことだな。」
「言葉の意味を聞いたんじゃねぇ！」
まあ、ですよね。知ってた。にしてもよく考えてみると女の子の奴隷か…、そういう言い方をするとなんだかエロくなるな。実際は微塵もエロさなんてないが。
「強襲科であたしのパーティに入りなさい。そこで一緒に武偵活動をするの。」
「俺は無理だ。俺は強襲科が嫌で、探偵科に転科したんだ。それに、来年には武偵自体やめて、別の学校に行こうと思ってる。なのにまた強

襲科に戻るとか、冗談じゃない。」
　遠山はそういうと、お前は?と目で聞いてくる。俺はそれに対して首を横に振ることで答える。
「そ、じゃあまあ、今のところはハチマンだけね。」
「おい、俺は条件付きだろ。入るの確定みたいに言うのやめろ。」
　俺の言葉は無視し、神崎はそれと、と付け加える。
「私には嫌いな言葉が三つあるわ。『ムリ』、『疲れた』、『面倒くさい』この三つは人間の持つ無限の可能性を自ら押しとどめる良くない言葉。二人とも今後はあたしの前で使わない事。いいわね。」
　何故お前の好き嫌いに俺たちが付き合わにゃいかんのだ。と思うが、口には出さない。神崎が傷つくことを危惧してね?俺は紳士であるがゆえに、女の子を傷つけるような言動は出来ないのだ。決して怖くて言えないとかじゃない。断じて。
「二人のポジションは…、少なくともキンジはあたしと一緒にフロントね。八幡は…。」
「フロントね。じゃない!そうまでして俺たちをパーティに入れたいのはなんでなんだよ!」
　遠山は、神崎の横暴な態度にうんざりしているのか、少し口調を荒くする。しかしそんな遠山の様子に、神崎はあきれたようにため息をつく。
「太陽はなんで昇る?月はなぜ輝く?」
　またなんかよく分からん話が始まったぞ。話の関係性が全く見出せん。
「ハチマンもだけど、キンジは特に質問ばかり。子供みたい。仮にも武偵なら、自分で情報を集めて推理しなさい。」
「どっちが子供だ…。」
　俺が小声でそう言った瞬間、
　バァン!バァン!
　部屋の天井に穴が開いた。
　パラパラと天井の破片が落ちた先。神崎は怒りでぷるぷるとふるえながら叫ぶ。

「あたしは高2だ!!!」
次は当てると目が言っている…。即座に俺は膝を折り、額を床につける。
「申し訳ありません。」
これ以上の被害を受けないためにも俺は即謝った。もはや謝罪というよりは命乞いに近いが、それでも神崎の怒りを鎮めるには十分だったらしく。
「ふん!」
銃をホルスターに収める音が聞こえる。どうやらお許しいただけたようだ。
そんな俺だけが命がけの漫才を横で見ていた遠山が口を開く。
「話を戻すが、俺たちをパーティに入れるような利点は全くない。わかったら帰ってくれ。一人になりたい。」
「まあ、そのうちね。」
え?そのうちって何?こいつ何考えてんの…?
と、ここで思い当たってしまう。こいつこの部屋にしばらく泊まるつもりで来ているのでは…。神崎が持ってきた妙にでかいトランク、あれが宿泊の荷物だとしたら全て合点がいってしまう。
自らの考えが杞憂であってくれと祈っていると、どうやらまだ気付いていない様子の遠山がさらに質問を続ける。
「そのうちっていつだよ。」
「キンジがあたしのパーティに入るって言うまで。」
そこで遠山だけを指名するのは、俺はもうパーティに入らなくても良いということを暗に示しているのだろうか。いやほんとに諦めてくんないかな…。
「でももう夜だぞ?今日はもう帰った方が良いだろ。」
「やっぱり気付いてないのね。あたし、あんたがイエスというまでここに泊まってく。」
やっぱりかあ~…。できれば当たってほしくなかった予感が的中してしまった。トランクを指さしているあたり、どうやら本当にあれらは全て宿泊グッズだったらしい。

神崎の言葉を聞いた遠山は混乱している様子で声を荒げる。
「ちょっ！…ちょっと待て！何言ってんだ！絶対だめだ！帰ってくれ！」
「うるさい！あんたたちがパーティに入るまでは泊まっていく！これは絶対に揺るがないわ！」
いやていうか男子寮に女子が泊まるのまずいだろ、と俺が正論攻撃を仕掛けようとしていると、
「出てけ！」
と、神崎が俺たちに言ってくる。いや逆じゃない？と口をはさむ間もなく、神崎は言葉を続ける。
「あんたたち二人とも頭冷やしてきなさい！しばらく戻ってこないこと！いいわね！」
そういうと神崎は銃を取り出して俺たちを脅してくる。取り付く島もないとはまさにこのことだ。
とはいえ、天下の神崎様に逆らうなど市民の俺たちでは出来るはずもなく。結局俺たちは寒空の下に放り出されてしまうのであった。
…俺、頭冷やす必要あったか？

第六話

「で、どうすんのあれ。」

三月。暦の上では既に春と言えど、まだ深夜には寒さが残る。そんな寒空の下、もう街灯の灯りが残るのみとなった商店街のベンチで、俺たちは一人の怪獣に対抗する策を思案する。

「最初から丸投げかよ…。」

「しょうがねえだろ。追い出す手段が思いついたら実行してるっつーの。」

「そりゃそうか…。」

その後、沈黙が流れる。互いに思いつくものはなく、時間だけが過ぎていく。

「やっぱ実力行使しかないんじゃねぇの。理不尽には理不尽で対抗するしかない。」

長い思案のあと、出した俺の答えは、かけた時間とは対照的に、最高に頭の悪いものだった。力こそパワー。

「俺らみたいな落ちこぼれ二人でどうにかなる相手じゃないだろ…。」

「でもお前確か入学時の武偵ランクSで突破してなかったっけ？本気出せばどうにかなったりしないの？」

武偵校では、入学時の試験の成績に応じてランク分けがなされる。最低ランクEから始まり、D、C、B、Aと上がっていく。そしてそのAの一つ上に位置しているのがSランクだ。Sランクは現在世界に712人しかいない。そして、神崎は当然のようにそのSランクとされており、また、遠山も入学時にはSというランク付けがなされている。なので、俺の力こそパワー作戦も、遠山がいけば通用するのではないかと考えたのだが…。

「…あれは違う。俺はちょっとした条件で、それくらいの力を発揮できることもあるって、それだけだ。」

微妙な物言いだな。まあ、恐らくは深堀りされたくないということなのだろうか。であれば俺も、特に追及するつもりもない。

「とりあえず、神崎を追い出すのには使えないってことでいいのか？」

「ああ、間違いなく使えない。」
「さいですか…。」
　会話は途切れ、もう一度、しばしの沈黙が流れる。マジであいつに対抗する策がなさすぎる。単なるわがままお嬢様ならまだしも、仮にもＳランクの武偵だ。しかも頑固で説得の使用もない。これはもはや土下座で頼み込むとかしかないかもしれん…。
「…気持ち悪いから聞いておく。」
　そんなことを考えていると、遠山が何の脈絡もなくそう告げてくる。
「比企谷。お前、気にならないのか？」
「何が。」
　何の話だよ。俺が気になりそうなものの話か…。最近俺の中でホットな話題としてはＭＡＸコーヒーのドロップが千葉の市原ＳＡ限定で売られているという話があるが、もしかしてそれか？それなら今度の日曜に買いに行くから、気になるならこいつも一緒に連れて行ってやらないこともない。
「俺の…、力というか、入学時Ｓランクっていうの、知ってたんだろ？」
　ＭＡＸコーヒーの話ではなかったが、さっき神崎にも聞かれた、話題としては十分ホットな話題だった。
「まあ知ってるけど、別に気にしてない。特に聞く気もねーよ。」
「…なんで？」
　心底不思議だといった様子で遠山が聞いてくる。
「いや、誰でも人に聞かれたくないことくらいあるだろ。俺はそこにズカズカ踏み込んでい行くほどふてぶてしい人間じゃねえんだよ。…それだけだ。」
「なら、気になってはいる、ってことで良いのか。」
「…人並み程度だ。さっき言ったが、別に聞く気はない。だから、別にお前が話す必要もない。」
「…じゃあ、比企谷。取引だ。俺の秘密を、お前に明かす。だから、お前も、何か隠してるなら言ってくれ。」
　遠山は、真っ直ぐに俺の目を見据える。…こいつ、捻くれてそうに

見えて、実際は大して捻くれてないんだよな。こういうとこ。
この一年間近く、こいつと生活してきて心底思う。俺とこいつは全く違う。世間が俺を捻くれていると評するのなら、こいつは世間一般で見れば純粋と言って差し支えない。強いて言っても、やさぐれている程度のものだ。だからこそ、気持ち悪いことを気持ち悪いと言い、他人に踏み込むことを厭わない。
…それゆえに、打算と策略の中で生きてきた俺には、理解も、…信用もできない。出来る方がおかしいのだ。
一人一人違う人生で違う経験をしてきた。育ってきた環境が似通っている兄弟、双子ですら、違いは生まれる。それが他人と他人にもなってしまえば、互いの考えに真の理解などというものは在り得ない。そこにあるのは、ただ似ている経験で分かったふりをしている、共感にも似た、ひどく気持ち悪い何かだ。
「…もし俺の秘密が本当にあったとして、お前の秘密と釣り合いが取れてるかなんて分からんだろ。第一、話したところで何が変わるわけでもない。」
だからこそ、俺は、遠山キンジを信用するわけにはいかないのだ。だからこそ、遠山キンジは俺を信用してはいけないのだ。信用なんてものは、綺麗な言葉で覆い隠した、本質的な強制だ。
「は？いや、釣り合いとかじゃない。ただ、俺はお前の…。」
「それに、お前は俺にそれを話して良いと、本気で思ってるのか？お前に何があったのかは知らん。だが、その秘密を誰にも明かしていないということは、何か大切な情報のはずだろ。それを言うってことが、どれだけのリスクを孕んでいるのか、よく考えたのか？」
「当たり前だ！俺は…！」
「それでもなお話せると言えるなら、俺は、こう考える。俺の情報を聞き出すために作り出した交渉材料、でっち上げなんじゃないかってな。神崎にでも聞かれたのか？お前がそんなに人のことを気に掛けるなんてな。正直意外だ。お前はもっと他人に無関心な人間だと思ってたよ。」
遠山の言葉を遮り、俺が口早にそう続けると、遠山は俯き、黙り込

む。そして、小さな声で、
「…クソッ。」
遠山はただ一言そう言って、俺に背を向け、一人で寮に向かって歩き始める。
「他人ってなんだよ…。」
もう八時前とはいえ、まだまだ商店街は車通りが多い。だというのに、遠山のその呟きは掻き消されることはなく、確かな質量を持って俺の耳を叩いてくる。そう感じられたのは、一体何故だろうかと、そこまで考え、思考を止める。今考えたところで、俺が何か言ったところで、上塗りにしかならない。覆水盆に返らず。一度零してしまったのなら、それはもう既に、染み込んでゆく様を眺めるしかないのだ。
…そんなどうしようもない思考だけが、やけに冷静にまとまっていく。ただ、俺は何か間違えたのだと、そのような漠然とした、後悔にも似た喪失感を食む。
いつからか、街灯は明滅することすら諦めていた。ともすれば、二度と光ってはいけないと、自らを戒めているように。
顔を、優しく撫でる風は、どことなく暖かく、近づいてくる春を知らせる。桜の蕾も顔を見せ始め、もうすぐ暖かな季節が巡ってくるのだろうと、そう思った。
…だというのに、その足音は、やけに孤独で、寂しげだった。

第七話

今日も一人で家を出る。普段俺は朝飯を作る関係上、遠山よりも早く起きる。そして朝食を作り終えれば、他には特にやることはなく、必然的に俺は遠山よりも早く準備が済む。

去年、遠山がルームメイトになった最初の登校日に、同じ部屋なのに時間をずらすのも変な話、と言われ、それ以降はずっと二人で登校してきた。

まあ、それも神崎の出現によってしばらくは脅かされていたわけだが。やれ朝食が手抜きだの、やれ一緒に登校するだの。お前が男子寮から出てくるのを誰かに見られたら学校中の騒ぎだろうに。

しかし、ある日を境に神崎はうちの寮から出ていった。何やら遠山が『神崎が最初に関与した事件を一度だけ手伝う。』という契約の元、解放されたらしい。それ以降、誰かと一緒に登校することもなくなっていった。

一人で登校していて、今までがおかしかったのではないかと、そう思うことがある。俺たちの関係性がどこかでずれ始めていて、それが露見したのがあの夜だったのだと。ならば、またこのような関係性に落ち着くのは当然であり、わざわざ一緒に登校する必要もない。

…自分に言い聞かせるような言葉を並べ立てながら、俺は傘を開く。

今日の東京は局地的に降雨、との予報だったが、どうやらこの武偵校のある浮島は、ピンポイントでその局地に分類されるらしく、そこそこな強さの雨が降っていた。

今年はもう既に春の暖かな陽気を感じることも多くなってきたが、雨と合わさると急激に気持ち悪い。生暖かく、まとわりつくような陽気だとそうなるのだろうか。

まあ確かに、陽キャパリピみたいな連中は見てる分には特に何も思わないが、こっちに絡んでくるのはとんでもなく不快なので、陽気というのは元来、過度に接したりするのは不快なものなのかもしれない。

しかしそうなると、陽キャは他人に絡むという行為が大好きであるため、結果的に不快な生き物、ということになる。なら逆説的に、ぼっちの俺は誰も不快にしようがない、完璧な生き物であるという方程式が成り立つのでは？

なるほど、俺が話しかけたりしても冷たくされるのは俺を不快にさせまいという気遣いだったのか。超納得。

そんなことくだらないことを考えていると、どうやらゆっくり歩きすぎたらしく、目の前でギリギリ乗る予定だったバスが行ってしまった。まあ、見る限りめちゃくちゃ満員だったようなので、間に合っていても見過ごしたかもしれないけど。

次のバスが到着すると、寮暮らしの生徒達がぞろぞろとバスに乗り込む。俺はほぼ前の時間から待っており、バス待ちの行列の先頭に陣取っていたので、座ることができた。災いを転じて福となす。予定より一本遅くて正解だったかもしれん。

バスの中から何を見るでもなく、ぼーっと外を眺めていると、ふと、違和感を感じる。直感と言っても良いかもしれない。誰かに見られているような、気持ちの悪い感覚。好奇の視線と似ている。まだ新学期初日のことを気にしている奴でも、バス内にいるのだろうか。

―プルルルル、プルルルル

ふいにバス内に、誰かのケータイの音が鳴り響く。

「ご、ごめんなさい…。マナーモードにしてたはずなのに…。」

どうやら音の出どころはバス前方の座席に座っていた女子生徒のようで、焦って鞄からケータイを取り出そうとしている。おいおいマナーがなってないな。俺だったらバス、電車、家に関わらずケータイが鳴ることなんてありえないというのに。それ俺の連絡先知ってるやつがいないだけじゃねーか。

「このバスには、爆弾がしかけてありやがります。」

突如聞こえてきたその声に、俺はハッとし、その声の聞こえてきた方を見る。

先程ケータイが鳴っていた女子だ。そのケータイから声がしている。そして聞き間違うはずもない。この、継ぎ接ぎじみた機械音声は

…。
「速度を落とすと、爆発しやがるです。」
「武偵殺しだ！」
バス内の誰かが叫ぶ。一言でその情報が行き渡り、車内は騒然とし始める。
だが、武偵校は伊達ではない。強襲科で見る顔以外でも、多くの生徒は、現状をどうやって打破するかを考えているようだ。既に臨戦態勢に入っていると言っても良い。
「乗客は、おとなしくしやがれです。」
どうやら手口は俺たちのチャリジャック事件の時と同じだ。運転手も、この学園島での勤務が長いのだろうか、出来るだけ信号に捕まらないようなルートを選択しているように見える。落ち着いている、とまではいかないにしても、冷静さは保ってくれているようだ。
…時間は、ある。
チャリジャックと同じであれば、爆弾以外にも、何かバス外からこちらへの攻撃手段があるはずだが…。
そう思い、窓の外を見回す。
特に変わった物は見つけられない。しかし、本当にこの前と同じ犯人だとするのであれば、いないということはありえない。俺の窓から見える範囲だと限界がある。別の部分からも探したいところだが…。
ふと、あるものが目に付く。窓から見えた、バスのサイドミラー。その中に赤い何かが映り込んでいる。目を凝らしてよく見れば、真っ赤なオープンカーが後ろを走っている。スピードを上げるしかなくなったバスと同じ速度で、だ。運転席を見ると、そこにハンドルを握る運転手の姿はなく、さながらミニ四駆のように、車だけでこのバスの後ろを付けてきている。
間違いない。あの車だ。あの車だけだろうか、他にそれらしきものは見えない。この前の銃付きセグウェイのようなものはないだろうか。
と、頭を巡らせつつ、学園島を一周したくらいだろうか、
「青海南橋を、渡りやがれです。」

今までになかった明確な指示が、件のケータイから聞こえる。青海南橋？

渡って何をするつもりだろうか、学園島から青海南橋を渡ればお台場に着くはずだ。お台場で何かあるのか、それともお台場の更に先にある何かを目的としているのか。

いや、それは今考えるべきではない。既にバスは青海南橋に向かっている。武偵殺しの手口としては、爆弾で自由を奪ってから、銃のついた何かで追い回す、というものだ。

となれば、今現在の問題点はわかりやすい。バスに仕掛けられた爆弾の位置、そして銃のついた何かがどれくらい、どこに、どのようにして用意されているのか、という点だ。

爆弾の位置は、武偵の防弾制服、を身に着けた生徒の指示で、俺含め車内にいた生徒たちが今も捜索しているが、恐らくは徒労に終わるだろう。俺なら絶対に車内には設置しない。最も効果を発揮し、更に解体もしにくい位置がベスト。

…俺なら車体下に爆弾を張り付ける。とはいえ、俺は車の構造に明るいわけでもない。間違っているかもしれないし、よしんば当たっていても具体的な細かい位置までは分からない。爆弾についてはここで一度切り上げだ。

次に、銃をつけ、このバスを追い回しているはずの何か。とりあえず、あのオープンカーは確実だろう。挙動が怪しすぎる。

しかし、前回と同じ犯人であれば、ここまで簡単な計画の穴を残しておくとは考えにくい。一台だけとは思えん。しかし先程から気になるものと言えばその一台のみ。地上ではない？陸でないなら、海、あるいは…。

思考がそこまで達した瞬間。窓の外からヘリコプター特有のプロペラ音が聞こえることに気付く。やはり空からも見られていたのか。

…いや、だとしたらおかしい。武偵殺しは過去、ラジコンヘリを使っていたこともあったはずだ。それがバス一台に本物のヘリ、というのは、流石に行き過ぎだ。

そうして思考をまとめていくと、一つの可能性に行き当たる。男子

高校生二人が、誰も気付かないようなチャリジャックに遭っていることすら見逃さず、救出の危険性を考慮するまでもなく助けに来てしまうような、わがままで傍若無人。果ては融通も利かず、助けると言ったら絶対に、何が何でも助けにくるような、バカ真面目でとんでもなく優秀な武偵を、一人知っている。

バスの上に何かが落ちてきたような音が聞こえる。そして、言い争うようにしている、一年も前から聞き慣れているルームメイトの声と、…ちょうど最近聞き慣れた、わがままで、そしてとんでもなく優秀な武偵の声。

…対応早えよ。流石はSランク。

第八話

やはりというべきか、恐らくは神崎に呼ばれたであろう遠山が窓から入ってくる。混乱状態だった車内は、救出の到着により一気に活気づく。まあ、そんなのは車内の生徒だけで、当の本人は雨に濡れたせいか、寒そうに震えている。今の遠山はとんでもなくクールなようだ。物理的に。

遠山は防弾ベストにフェイスガード付きのヘルメット、フィンガーレスグローブを装着し、体のあちこちにベルトが締められている。強襲科が突撃の際などに用いるC装備だ。これらを装備してから救出に来てこの早さとかマジかよ。とんでもない判断の早さだ。これには流石の鱗滝さんも裸足で逃げ出すレベル。

「遠山、着いたばっかですまん。ちょっといいか。」

「…比企谷？」

俺が声をかけると、遠山は少し眉をひそめる。

「まあ、色々思うところはあるだろうが、今は後にしてくれ。神崎はどうした。」

「…お前が乗ってるのに驚いただけだ。アリアもこのバスに降りてきてる。バスの背面に向かっていったはずだ。」

バスの背面。恐らくは神崎も車外に爆弾が仕掛けられていると判断したのだろう。ならば、そっちはあいつ一人で十分事足りるだろう。こっちは差し当たって、あのオープンカーを処理するべきだ。

「お前の言う通りだったよ。このバスは遠隔操作されてる。あと、バスに比企谷が乗ってた。協力してもらえるよう伝える。そっちはどうだ。」

遠山がヘルメットの側面を押さえながら、俺ではない誰かに話しかける。ヘルメット内のインカムか何かで神崎に連絡を取っているのだろう。

「了解だ。気を付けろよ。」

通信が終わったらしく、遠山はこっちに向き直る。

「比企谷、こんな状況だ。お前にも協力してもらいたい。」

「当たり前だ。死にたくないしな。…とはいっても、お前ら二人だけで大概のことはなんとかなりそうだけどな。」
「…この前言ったろ。今の俺はただのＥランク武偵だ。神崎との約束だから来たが、本来呼ばれるような人間じゃない。」
「そんなん俺もだっつの。神崎と通信できるか？」
「ちょっと待ってくれ。」
　そういうと遠山はヘルメットごとインカムをこちらに寄越してくる。
「神崎、聞こえるか？」
『ハチマン!?どうしてあんたがそのインカム持ってんのよ？キンジは？』
「今一瞬だけ借りてる。聞きたいこと、伝えることがいくつかある。お前は今爆弾処理か？」
『…ええ、そうよ。カジンスキーβ型のプラスチック爆弾。炸薬の容積は３５００立方センチはあるわ。』
　状況判断が早くて助かる。神崎は爆弾の解体をしながらだろうに、素早く、正確に爆弾の詳細な情報を伝えてくる。
　ん？ていうか炸薬多くね？何３５００って。バス爆破するにはちょっと多すぎませんかね…。起爆したら確実にバスに乗っている全員がお陀仏だ。
「了解。降下中に犯人が使っていそうなラジコンヘリとかの類を見たか？」
『特に見てないわ。バス相手にラジコンヘリは追跡が面倒だから、ないと思う。』
「現状こっちで確認してるのはバス後方のオープンカー。こいつはほぼ確定だ。警戒を頼む。他は特に見つけられていない。バス外からも確認頼む。」
『了解したわ。あんたはキンジから最低限装備借りて、こっちを手伝―あっ！』
　バスに何かが追突したような衝撃。車内の生徒たちがもつれるように転がる。

「神崎？神崎？」
神崎からの応答がない。なにかあった。そうみるのが妥当だろう。
インカムが壊れた、あるいはヘルメットを落としただけだとは思われる。しかし、万が一の場合、救出が必要になる可能性もある。
「遠山、神崎からの通信が途絶えた。様子を見に行ってくるから、装備を―」
「アリアが!?」
俺が言い終わる間もなく、遠山は、恐らくは神崎の様子を確認したかったのだろう。焦った様子でバスの窓から身を乗り出す。その動きとほぼ同時に、開いた窓からウォン！と独特のアクセル音がした。先ほどのオープンカーに動きがあった。先の衝撃も、オープンカーがバスに衝突した衝撃だったのだろう。
「皆、伏せろ！」
遠山が叫ぶ。ナイス判断だ。車内の全員が遠山の指示に従って頭を低くする。その直後、無人のオープンカーからＵＺＩが顔をのぞかせ、乱射。
無数の弾丸がバリバリバリバリッ！とバスの窓ガラスを破壊して回る。まるで嵐だ。
弾幕が落ち着いたのち、車内の状況を確認する。見る限り生徒に被害は出ていない。車内に窓ガラスが散乱した程度だ。
いや、待て、違う。運転手は？この弾幕の中でもスピードを落とすことは出来ない。姿勢を低く、なんてことが出来るはずがない。
「遠山、運転手の方を確認しろ！場合によっては運転を変わってくれ！」
「わ、わかった！」
運転に関しては遠山に任せ、俺は外の様子を見に行く。未だ神崎との通信は途切れたままだ。恐怖か焦燥か、心臓が早鐘のように打ち鳴らされる。
一度、落ち着け。焦るな。早さよりも確実性を重視するべきだ。俺はあいつのように両立は出来ない。ならば、片方を犠牲にしてでももう片方を。

「比企谷！俺も神崎の様子を見に行く！」
俺がどうやって神崎の様子を見に行くか思案していると、既に窓に足をかけた遠山がバスの天井まで登ろうとしているところだった。運転席を見ると、乗り合わせた生徒だろう。慌てる様子なくハンドルを握っている奴がいる。
運転に関しては大丈夫と判断して良い。しかし、遠山がヘルメットもなしに外に出る、というのは非常にまずい。
「待て！遠山！」
呼び戻そうと声をかけるが、もう既にバスの外に出ていってしまっているのだ、風の音でこちらが何を叫んでも聞こえはしないだろう。
俺は遠山を追うようにして天井に出る。
「遠山！」
「アリア！ヘルメットをどうした！」
遠山は俺の声など耳に入っていないのか、強風の中、這うようにして神崎のほうへと向かう。同時に、爆弾の解除を行っていた神崎がワイヤーを伝ってバスの屋上へ上ってくる。
「キンジ!?なんであんたまで来てるのよ！」
「お前を心配してきてやったんだよ！」
「危ないわ！どうして無防備に出てきたの！なんでそんな初歩的な判断もできないのよ！すぐ車内に隠れ―」
神崎が言い終わる間もなく、豪風の中に独特のアクセル音が混じる。犯人のスポーツカーだ。スポーツカーはバスの横から前方へと駆けてゆく。
「伏せろ遠山！」
叫ぶ。が、すぐにそれは無意味だと察せられてしまう。遠山は俺からも、神崎からも遠く、俺や神崎が咄嗟に庇えるような距離にはいないのだ。
ならばこれから放たれるであろう弾丸全てを俺が処理する？冗談じゃない。物理的に不可能だ。そんなことができるやつは人間じゃない。
俺が防弾制服で弾を受け止める？防弾制服、なおかつヘルメットを

装着しているといっても、バスの上で食らえば、衝撃で落下の危険性もある。よしんば落ちなかったとして、相手はフルオートの銃だ。いつまでも受けきれるようなもんじゃない。

…落ち着け。やるべきことを整理しなければ。

少なくとも銃の破壊。遠山のカバー。この二つはどちらも必ず行わなければ詰み。

いや、一つだけ、方法はある。詰み、というのは少し違う。遠山も、神崎も、そして俺も皆揃って王将であれば、詰みだったかもしれない。だが、生憎俺は王将なんて滅多なもんにはなれる器じゃない。

…当たり前のことだ。結果を出すためのリソースが足りないなら、結果を削るしかない。

俺はナイフを取り出す。右手に、普段俺が帯刀しているサバイバルナイフを握りしめる。

この事件の犯人が武偵殺しじゃなかったとしても、これで事実上の武偵殺しになっちまうな。

「ハチマン！後はあんたどうにかしなさい！」

ハッとする。ぐえっ、という遠山の声。

直後、発砲音が、四回。二回は目の前のスポーツカー。もう二回は。いや、考えるまでもない。

神崎が発砲したのだ。あいつの持っている、幾度となく脅された二丁拳銃。その音だ。神崎は既に行動を起こしていた。恐らく先ほどの遠山の声は、神崎が遠山に何か、体当たりでもして庇ったのだろう。

心底、とんでもないやつだと思った。たった一人で、銃の破壊、遠山のカバーを、恐らくは完璧に、やり遂げやがった。

俺は、恐らくは背後で遠山を庇ったであろう神崎を射止めんと飛来する弾丸に、右手に握ったナイフの腹を合わせ、左手で抑える。

ギャンッ！ギンッ！と音を立てながら、弾丸が弾ける。

それ以上の追撃はなく、見れば、やはりというべきか、スポーツカーの銃座は破壊されている。あまり本気の射撃をしているところは見たことがなかったが、うん。頭おかしいと言わざるを得ない。

…もはや恐怖すら覚えてきた。体当たりしながら銃打ってこの精

度出せるってどうなってんだよ。身体機械でできてるんじゃないの？
「やるじゃない！助かったわ！」
俺が、神崎に畏敬というか、もはや畏怖にも近しいことを考えていると、背後からなにやらとんでもなくウキウキしていそうな神崎の声がする。
「…偶然弾けただけだ。てか、爆弾解除の方は？」
一応偶然の部分を強調して言うが、まあ、もう意味ないだろうな…。誰がどう見ても偶然じゃなかったし。
この流れは分が悪いということもあり、この事件のことに話と、ついでに頭も切り替える。かなりの窮地を乗り切りはしたが、まだ事件は解決していない。
「ヘルメットを持ってかれたから中断したわ。作戦を変更するの。」
「了解だ。一度車内で良いか？」
「オーケーよ。」
神崎が車内にワイヤーを張りなおす。俺たちがやるべきは周辺の警戒だ。
「遠山。」
先程から何も話すことなく、俯いている遠山に声をかける。すると、遠山はハッとして、俺の方を向く。
「どうした、比企谷。」
…気にしすぎだ。アホ。
「助かった。あのスポーツカーを誘い出し、破壊まで持っていけたのは、正直でかい。だからまあ、なに？その、あれだ。…ありがとう。」
俺がめちゃくちゃ言葉に詰まりながら言うと、遠山は首を横に振る。
「…そうじゃない。俺はそんなこと考えて動いてたわけじゃない。何も考えずに動いて、お前らを危険に晒しただけだ。」
「だが、結果として犯人に大きな損害を与えた。なら、お前の判断は正しかったってことだろ。お前が気付かないうちに、いつだか言ってた、なんかの条件でも発動してたんじゃねーの？」

知らんけど。と締めくくる。遠山は、少し俯いた後、そうだな、と呟く。
「悪かった。事件に集中する。」
「最初からしてくれ…。」
集中してなかったのかよ。本当だとしたらこいつ余裕ありすぎるだろ。この中の誰よりも強いじゃねーか。変身三回くらい隠してんのか？
「張れたわ！戻るわよ！」
神崎の一言で俺たちは車内に引き返す。ワイヤーを握る遠山の手は、もう震えてはいなかった。

第九話

件のバスジャック事件から、もう既に三日経過した。まだ、という言葉を使うにしてはどうにも、未だ鮮明な記憶は現実味を帯びておらず、遠い昔、あるいは夢だったのではないかとさえ感じられる。それほど、あれ以降の出来事にはリアリティがなかったのだ。

まずバスの中で神崎に聞かされた案だ。その内容は、狙撃科のSランク、レキという人に車体下の爆弾を撃ち抜いてもらう、というものだった。しかもヘリの上から。

またこいつは無茶苦茶なこと言い出したぞ。そんなゴ○ゴ13みたいな人間はいない。

と、最初は思っていたんだけどなぁ…。そんなゴ○ゴ13みたいな人間が実在していたのだ。

この部分が、バスジャックの記憶の中で最も現実味を失わせている部分なのだが、当然デューク○郷さん本人が実在したわけではない。だが、その狙撃の精度は、それこそ漫画でしか見たことがないようなレベルだった。

弾丸を車体下にくぐらせるだけで十分神業の領域だろうに、それをヘリに乗って、爆弾を爆発させずに撃ち抜けとか、本当に漫画の世界。ほんとに意味わからん。あのスナイパーさんが実は犯人で、撃ち抜いたわけではなく、爆弾が自動ではがれるように設定してあったとかの方がよっぽど現実味がある。

まあ、こうして、漫画の世界から出てきたと思われるとんでもスナイパーさんに助けられ、ようやくバスジャックを退けることに成功した。

その後、武偵殺しの銃付きの無人兵器に襲われることもなく、俺たちは無事バスを降りることに成功した。結果的には、被害らしい被害はバスの運転手が怪我をした程度。その運転手も、命に別状はなかったらしい。

これでこの事件の幕は引かれ、皆笑ってハッピーエンドの大団円。

…と、なるはずだったのだが、この事件で、唯一命の危機に瀕して

いる人間がいた。俺である。
武偵殺しの無人兵器について、俺は完全に他にもある前提で動いていたせいで、あいつら二人にめっちゃドヤ顔で「他は見つけられてない。」とか言ってしまっていたのだ。その想定で判断の択を狭めたという事実もそうだが、何よりも自分自身だけが気付いているかのような態度で二人に警戒を促し、その結果何も襲ってこないという、教科書に載るレベルの一人相撲。恥ずかしすぎる…。
いっそのこと10台くらい無人兵器に来ていただいて、ハチの巣にされた方が良かったような気さえする。ある意味、この事件で最も死に近かった人間と言っても過言ではないかもしれない。もうほんとに今超死にたい。
不覚にも思い出してしまい、俺はベットの上で悶え、うーうー唸る。もうヤダ死にたい学校行きたくない部屋から出たくない。
「比企谷、うるせえ…。」
どうやらそのどたばたで遠山を起こしてしまったらしく、遠山が、眠そうながらにこちらにめちゃくちゃうざったそうな表情を向けてくる。
「すまん。今日朝飯適当に食って。」
未だに精神的ダメージから抜け出せていない俺は、枕に顔を押し付けたままそれだけ答える。相当もごもごしていたので、聞き取れたのかは定かではないが、遠山はベッドから起き上がり、大きく伸びをする。
「今日、一緒に登校しようぜ。」
＊
「そういや比企谷、アリアが今度の土曜に話があるって言ってたぞ。」
通学途中、バスの中で遠山がそんなことを告げてくる。
「…俺土曜はちょっとあれだから。行けないって言っといてくれ。」
「行けるらしいぞっと。」
いつの間にかケータイを取り出していた遠山が、画面を指でシャッシャッと操作する。恐らくはメールだと思うが、どうにもおかしい。今遠山の発した言葉の通りに文章が送られていたとしたら、俺がまる

で土曜日に時間が空いているかのように聞こえる。
「いやいや、ちょっと待て。俺土曜日はあれがあるんだよ。ほらあれ。バイトとか、そういう系の…。」
「お前働くの好きじゃないだろ。いつだかの進路希望アンケートに専業主夫って書いて出してたって、白雪から聞いたことあるぞ。」
「なんでそんなもんチェックしてあんだよ…。クラス違うじゃん…。」
「白雪が生徒会長だからだよ。お前含め、何人かアンケートにふざけたこと書いてたやつがいたらしくてな。生徒会の議題に挙がったことがあるそうだ。」
　なるほど。すごい納得してしまった。確かに俺も先生だったら進路希望アンケートにそんな解答してくる奴の相手はまっぴらごめんだ。絶対面倒くさい。生徒会に仕事を投げて、適当に処理させるというのは賢い判断だ。俺もいつか部下ができたら使おう。
　ハッ!?自分自身の思考回路が自動的に働く未来を見据えていた…。日本の教育の中で、もう既に思想が立派な社畜へと改造されつつあるのかもしれない。
　そんなことを考えていると、遠山がおもむろにケータイを取り出し、先ほどのように画面をなぞる。
「今度の土曜十二時、新宿駅集合。だそうだ。」
「え?何急に?」
「アリアからのメールだよ。なんでわざわざ新宿なんだろうな。」
「いや俺に聞かれても…。」
　てか新宿駅って一言に言っても集まるのムリだろ。新宿駅は日本が作り出した迷宮のひとつだぞ。東口西口南口までは良いとして、中央東口と中央西口、東南口とか、もはや何がどう違うのかわかったもんじゃない。一度行ったことがあるが、迷いに迷い、駅構内で一時間近く歩く羽目になった。その日の帰りには、文字通りもう二度と行きたくないと思ったものだ。
「神崎に集合場所だけ変えるよう言っといてくれ。新宿駅待ち合わせとか自殺行為だ。新宿駅だけで一時間近く彷徨うことになるぞ。」
「了解だ。伝えとくよ。」

遠山はそういうとまたもメールを打ち始める。
「そういえば。」
メールを打ち終わったらしく、遠山はケータイを閉じ、ケータイから、俺の方へと視線を移す。
「比企谷はアリアと連絡先交換してないのか？」
「してないな。っていうか逆に、お前が神崎の連絡先知ってたことに驚いたんですけど。」
「あー、ちょっと前に一緒にゲーセンに行く機会があってな。そこで交換したんだ。」
「あいつゲーセンとか行くのか。意外だな…。」
「俺についてきただけだけどな。クレーンゲームとかめっちゃやってたぞ。一個も取れてなかったけどな。」
あー。なるほど。そう言われると、特に意外にも感じない。むしろ似合っているようにすら思う。多分金大量にスったんだろうなぁ…。一個も取れずに地団太を踏む神崎の姿は想像に難くない。
「にしても、俺からすれば比企谷が連絡先知らなかった方が驚きだ。同じ強襲科なんだから、話す機会だって多いだろ。」
「いや全然話さねえよ。強襲科でも、クラス分けされてるの知ってるだろ。」
「ああ、そういやそうだったな…。」
強襲科では、実力に応じたクラス分けがなされている。強襲科生徒の成績順に、上から半分は強襲科担任の蘭豹先生、そしてそこからあぶれた組は、副担任の平塚先生のクラスになる。当然俺は平塚先生のクラスに分類されているわけで、神崎と授業で話す機会なんてものは一切と言って良いほどないのだ。
「でも、あいつ俺が探偵科のクエストを受けたときには付いてきたんだよな…。」
「まあ、あいつの中で俺は本気出してない判定受けてるからな…。授業見に来たところで意味がないとでも判断されたんじゃねーの。」
あとは単純に興味の差という可能性もある。なんならそっちの方が可能性として大きい気もする。あんなに情熱的に誘ってくれたの

に！あたしとは遊びだったっていうのね！
情熱的に奴隷に誘われるとか詐欺でも聞いたことないんだよなぁ…。
「まあ、そんなもんか。」
俺がハリウッド級の名演技を脳内で繰り広げていると、遠山は座席から腰を上げる。見やれば、どうやら学校に到着したらしく、バス通学の生徒達は流れるように出口へ向かう。
…その光景は、最近とも、昔ともとれない、ほんの一年ほど前の景色と重なり、既視感を覚えさせる。
一年足らずだ。たったそれだけだったのに、いやに慣れ親しんでしまった。
「何ニヤニヤしてんだお前…。ちょっとキモいぞ。」
「…残念だったな遠山。ニヤつかなくても俺のキモさは変わらない。」
…ああ、全くだ。自分で自分が気持ち悪い。こんなもの、嫌う側の人間だったはずなのに。
本当に、気持ち悪くて、心地良い。

第十話

約束の土曜日、新宿駅は休日ということもあってか、学園島に比べると圧倒的に人通りが多い。さらに、この迷宮のような構造も相まり、もうだいぶ帰りたくなっている。ていうかほんとにもう帰りたい。神崎には遠山から連絡してもらって、先に帰っちゃおうかな…。

そんなことを考えながらも、実際にそんなことをすれば神崎の二丁拳銃による、死に直結する弾幕ゲーが始まってしまうことは明白なので、おとなしく待ち合わせ場所へと足を運ぶ。

西口改札を抜け、カフェへ向かう。このカフェは、西口周辺の待ち合わせにはよく使われるらしく、いわゆるリア充といったような風貌の連中が集まっている。金髪を筆頭に、ピンクとか緑とか、果ては髪の左側から右側にかけて、綺麗に七色使った虹色になってる奴もいる。

なんでリア充って髪染めんの好きなの？髪染めないとリア充仲間に入れてもらえないルールでもあるの？

そんな派手派手しい連中の少し奥、これまた派手な赤い髪の少女がいる。一人で隅の席に腰かけ、コーヒーを啜っている。その小さな背格好のせいか、カップで優雅にコーヒーを嗜んでいるはずなのに、なんだか背伸びしてコーヒーを飲んでいる中学生のようにも見える。

いや、多分あれは中学生だな。流石に。なんか今店員さんが運んできたももまん食べて超幸せそうな顔してるし。ていうか頼みすぎだろ。三個もテーブルに並んでんじゃん。なんでまだ追加しようか悩んでますみたいな顔でメニューとにらめっこしてんだよ。つかその前になんでこのカフェももまん売ってんだよ。

結局注文したらしい中学生がももまんを頬張っているところをじーっとみていると、中学生と目が合う。

ももまん中学生はしばらく固まると、テーブルの上のももまんをたいらげる。そしてこっちに「早く来い。」と言わんばかりに手招きをしてくる。

「遅いわよ！あたしが集合時間を指定したらその三十分前にはくるこ

と！」
「一応まだ十分前なんですけどね…。」
「待ち合わせにおいて、レディを待たせるような行為は慎むべきよ。覚えておきなさい。」
　こちらにビシィッと指をさして貴族のマナーを説明してくるのは、中学生ではなかった。今日待ち合わせた張本人、神崎・H・アリアさんである。
「いやいや、あんまり早く着くとやる気満々みたいに思われて女子にドン引きされちゃうだろ。そこからその待ち合わせにいた女子が好きなことにされていじられ、最終的にいじられすぎてその女子が泣き、何故か俺が先生に怒られるまでがワンセットだ。」
「お前、経験したことない苦い記憶とかなさそうだよな…。」
　普段散々俺の自虐ネタを聞かされてきたであろう遠山でさえもちょっと引いている。正直この話は俺も思い出すと泣きそうになってくる。マジであの時の担任は許さん。
「で、なんの用で呼んだんだよ。こんなとこまで。」
　話を仕切りなおすように俺が言う。わざわざ新宿まで来なきゃいけない話、というのはどうにも思い当たらない。俺が新宿でやったことと言えば、亜種特異点となった新宿を復元したくらいだ。魔術髄液集め辛かったなあ…。
　俺が周回に苦しめられたことを思い出し、遠い目をしていると、神崎も、俺と同じく新宿に苦い思い出でもあるのか、ずいぶん重たい表情をしている。
「…今日は、あんたの話をするために呼んだのよ。」
　…ああ、なるほど。なんとなく察しがついた。確か二週間ほど前、俺と神崎は、俺が本気を出さない理由を言い当てることができたなら、俺がパーティに入る。しかし、もし言い当てられなかったなら、もうパーティには誘わない、という話をしていた。
「二週間前のこと、覚えてるわよね。」
「ああ。」
「じゃあ、単刀直入に言うわ。あんたがこの学校で本気を出さない理

由。」
神崎は、コーヒーを一口飲むと、続ける。
「疑い、ね。この学校だけじゃない。この学校より上、恐らくあんたは、この日本という国自体を、疑ってる。」
俺は黙って話の続きを待つ。
「あんたについて、調べたのよ。この二週間でね。情報科や、諜報科、探偵科にも協力してもらったわ。当然、キンジにもね。」
遠山の方を見る。遠山は顔を伏せており、何を考えているのかは分からない。
「あんたの妹、三年前に行方不明になってる。」
そう言われ、思わずハッとする。
「その当時妹さんは小学六年生。誘拐にしても迷子にしても、警察や、あるいは武偵の手にかかれば解決しない事件ではなかったはず。」
むしろ、と神崎は続ける。
「問題はこの後。妹さんが行方不明になった後、あんたの両親は捜索願を警察に届けているはず。だというのに、いつまでも捜索はされなかった。」
話を引き継ぐように、遠山が口を開く。
「…ここからは、俺たちの推測だ。捜索はされなかった。それは何故なのか。恐らく比企谷、お前はこう思ったんじゃないか?…何か、妹の捜索をされると都合の悪い勢力が存在しているんだ。とな。」
遠山は、言葉を紡ぐ。その言葉が、自らを責め立てるように聞こえるのは、きっと俺が、未だ自らを許すことができていないからなのだろうと、そう思った。
「警察や武偵を、そんな風に動かせる勢力なんてものはそう多くはない。少なくとも、もっと大きな権力を持っている勢力、ということになる。それが、お前はこの日本という国だと思った。」
忘れていた瞬間など一秒としてないはずだったのに、この痛みに自分が慣れてしまっていたことを実感させられる。
「その勢力が何にしても、警察も武偵も頼りになり得ないのであれば、自らが捜索に乗り出す以外はない。そして、武偵は警察よりも小回り

が利きやすく、何よりも武偵として活動を始められるまでが早い。」
　時間は全てを解決する、なんていうのは嘘なのだと、実感する。時間は、もっと残酷に、冷酷に、そして平等に全てに慣れさせていくのだ。怒りも悲しみも痛みも、皆すべからく、平等に。
「だが、武偵校も所詮は国家機関の一種だ。もしも自分の活動目的が自分の妹であることが判明するか、警戒されるだけだったとしても、お前の目的からは大きく遠ざけられる可能性がある。」
　もっと良い方法があったのだろうか。こんな状況にならずに済む方法が。と、頭の中で、何百と繰り返してきた問いを、久しぶりに繰り返した。
「だからお前は武偵校に通い続けるが、単位もギリギリ、特に実戦能力は皆無という、警戒しなくても良いほど弱い比企谷八幡を、演じ続ける必要があったんだ。」
　遠山のその言葉に、俺は何も言えなかった。俺が否定すればそれで終わる話だったはずなのに、否定の言葉はどうしたって、口から出てくることはない。
　何も言わない俺を見て、遠山が口を開く。
「比企谷、これから話すことは、お前の過去を勝手に調べた後ろめたさから、なんて理由じゃない。ただ、比企谷八幡が、遠山キンジを信用するに値すると、そう判断させるために話させてもらう。」
「…なんだよ急に、信用するとかしないとか、何の話だよ。」
「いや、そういう話なんだよ。比企谷、もしお前が俺を信用出来るなら、」
「俺を、その目的に協力させてほしい。」
＊
　遠山キンジは、かの遠山金四郎、本名を遠山景元とする、いわゆる遠山の金さんの家系だ。
　その金四郎の意思を継ぐように、代々遠山家は正義の味方として活動しているらしい。当然、遠山キンジもその例に漏れず、武偵を志していたらしいが、去年の冬、遠山の人生を一変させる出来事が起きた。
　浦賀沖海難事故。日本のクルージング船が沈没するも、一人の武偵

の活躍により、その一人の武偵を除いて被害を０に抑えた、という事件だ。しかし、その当時、クルージングに関わっていた一部の人間が、事故を未然に防ぐことのできなかった無能な武偵だとして、その武偵を非難したのだ。

その、非難を受けた武偵というのが、遠山金一、遠山キンジの兄だった。

「…だから俺はもう、武偵なんてやめるつもりなんだ。つまり、武偵校との関わりなんてものはほぼ無いに等しく、そんな陰謀に関わることもない。ってのが俺の言いたいことだ。あとはまあ、ここ一年近く一緒に生活してきたんだ。これで俺を信じられないんだったら、俺はもう何も言わない。さっき話したお前の過去ってのも、ただの推測だしな。」

遠山家が正義の味方の家系、ということに、どことなく納得してしまった。こいつは、きっとどこまでも優しいのだろう。優しくて強い、自分の信じた道を突き進める人間なのだ。まるで物語の主人公のようだと、そう思った。

…つくづく、似ていない。知っていたはずのそんな事実に、思わず笑ってしまう。ここまで正反対の人間同士が、同じ部屋に住んでいた、なんてのは、まるで人体実験のようですらある。

「…ごめん。あたしの話も、良い？」

と、ここまでずっと俺たちのやり取りを静観していた神崎が、口を開く。

「もうすぐ時間なの。着いてきて。」

そういった神崎は、手早く服や荷物をまとめるとこう続ける。

「ハチマン、あたしもこれから、あたしがあんたに協力する理由を見せるわ。キンジと一緒。だから、それに納得できたなら。」

神崎は腰に手を当て、こちらを指さし、きりりとしたつり目でこちらを見つめ、しかしどこか不安げに、あるいは願うように、こう言った。

「あたしのドレイになりなさい。」

前日譚

『学生時代から武偵として活動できるというのはいささか国の危機管理能力に欠けると言いますか…、』

テレビでやっているどうでも良い議論を左から右に聞き流しながら、夕食を食べる。比企谷家は、両親が共働きであるため、基本的にこの時間帯に家で夕食を食べるのは俺と、妹の小町だけなのだ。

しかし、今日ばかりはそんな両親に感謝せざるを得ないだろう。今日の比企谷家のメニューはから揚げ。うちの母ちゃんが作り置きしてくれたものを温めただけだが、これがめちゃくちゃ美味いのである。カレーとから揚げは自分の母ちゃんが作ってくれたものが一番美味い。マジでいつも母ちゃんありがとう。

まあ俺も小町も大好物であるこのから揚げを、俺たち兄妹だけで独占できるというのはかなり良い気分である。超幸せ。テンションも上がるし、目の前がきらきらするような気もする。ここまで行くとこの唐揚げに中毒性のあるヤバい粉とか入ってそうで逆に不安になるまである。

「あー!お兄ちゃんそれ小町のから揚げだよ!」

いつの間にか最後の一個となってしまっていたから揚げに箸を伸ばすと、正面から小町ストップがかかる。一瞬俺のコレステロール値を気にして言っているのかとも思ったが、別に俺が太っているわけでもなく、なんならコレステロール値なんて測ったこともないので、その線はないだろう。ははーん?さてはこいつもこの唐揚げ中毒に陥った身だな?

「えー…、俺も食いてぇのに…。」

俺も食べたくはあるが、母ちゃんの唐揚げ中毒の苦しみはよく知っている。あれは本当に苦しい。どれくらい苦しいかと言うと俺が小町に素直に渡すのを躊躇うレベル。俺が長男だから我慢できたが、次男だったら恐らく我慢できなかっただろう。俺が長男で良かったな小町…。

そんなことを考えながら、俺は小町に最後の一個を譲る。

「わーい！お兄ちゃん大好き！愛してる！」
「打算的すぎるだろその愛。お前が好きなの俺じゃなくて唐揚げじゃねぇか。」
「お兄ちゃんもそこそこ好きなのは本当だよ？あ、今の小町的にポイント高い！」
「愛情を唐揚げ基準で考えられてる時点でポイント低いんだよなぁ…。しかもそこそこって俺唐揚げに負けてない？大丈夫？」
「当たり前じゃん。この唐揚げにお兄ちゃんが勝っちゃったらおしまいだよ。」
　しゃくしゃくもぐもぐと唐揚げを咀嚼しながら、さらっとひどいことを言われる。しかしそうまで断言されてしまうと、俺がこの唐揚げを上回ってしまうことがとんでもない禁忌であるような気さえしてくる。しかし小町よ、この唐揚げも俺もどっちも母ちゃんに作られているのだから、価値としては同等。それゆえに敗北することはないのだ。残念だったな…。
「ごちそーさん。」
　食事を終え、カチャカチャと食器をまとめていると、テレビを見ている小町が、どことなく暗い顔をしていることに気付く。
「…どした。」
　俺がそう聞くと、小町はすぐにいつもの表情に戻り、こちらに向き直る。
「どしたって何が？」
「なんか一瞬俺みたいな顔になってたぞ。そんなに星○源の結婚が悲しかったのか？」
　俺がテレビを見ながら冗談めかしてそう言うと、小町はぽかんとした顔でこちらを見つめる。
　…え、何？ほんとにこいつ源ちゃんガチ恋勢だったの？特に追ってる印象無かったけどな。え、いやまさかガッキーの方じゃないよね。
「あー、うん。小町、結構源ちゃん好きだったから、結婚するとなんか不思議な感じだなーって思ってさ。」
　小町は誤魔化すように笑うと、それでちょっと見入っちゃってた

よ、とつけ加える。
…まあ、俺に話しづらい事もあるか。家族だからと、なんでも話さなきゃいけないわけじゃない。むしろ、家族だからこそ話せないことだって多いはずだ。
それに、小町は俺とは違って友達をちゃんと作り、相談できる関係性を持っているはずだ。なら、これ以上俺が踏み込むべきではないだろう。
「そか。」
俺はそれ以上何も言わず、部屋に戻る。まあ、小町ももう来年から中学生だしな。もう子供じゃないのだ。何でもかんでも手を焼くのが正しいとは限らないしな。
「まあ、なんかどうしようもないことあったら言ってみろ。兄ちゃん小町の為なら人攫いくらいまでなら出来るから。」
「うわぁ～。その発言にはシスコン的な意味でも倫理観的な意味でもドン引きだよ。どんだけ小町のこと好きなの。キモすぎだよ。ほんとにキモい超キモい。」
「キモい言いすぎじゃない？トカゲポケモンさんだってそんなには言ってなかったよ？」
「これは鳴き声じゃなくて小町の本心だよ。安心してお兄ちゃん。」
「何も安心できねぇ…。」
妹に本気でキモがられているという事実に本気でへこみ、リビングでゴロゴロ転がっていると、小町が俺の肩に手を置いてくる。ああ、女神小町様、私のような愚兄に手を差し伸べてくださるのですか…。
「んじゃ、小町お風呂入って寝るから、そこどいて。」
全然救いの手じゃなかった。なんなら邪魔者扱いだった。どうやら俺はのたうち回っているうちに、廊下に出るドアの前でゴロゴロしていたらしく、小町は肩に乗せた手をぐいぐいやって俺をリビングの真ん中ぐらいまで転がす。
「じゃ、おやすみお兄ちゃん。」
「…おう、おやすみ。」
いずれ小町にも反抗期というやつが来るのだろうか…。今ですら

この凹みよう、小町が反抗期になったら俺生きていられないんじゃないの？

＊

「…お兄ちゃん、今日何時位に帰ってくるの？」

朝、俺と小町が朝食を食べていると、急に小町がそんなことを聞いてくる。

「さぁ…。帰りにゲーセンとか寄ろうかと思ってるから、気分次第って感じだな。」

「…ゲーセンって一人で遊んでて楽しいの？」

「バッカお前、一人じゃないかもしれないだろ。俺にだって友達の…、春原ってやつがいてだな。」

「それお兄ちゃんがこの前見たって言ってたアニメのキャラじゃん…。」

小町はやれやれと言った様子でため息をつく。嘘がばれたことにより、俺の惨めさが余計に際立ってしまった。今度からは小町に話していないキャラにしておこう…。

「…まあ、そんな感じだ。何？今日なんかあるの？」

「別に、小町が気になったから聞いただけ。」

そういうと小町は、この話はここで終わり、とでも言うように無言で朝飯を食べ始める。

まあ、小町が何でもないというなら、聞く必要もないだろう。

二人とも朝食を食べ終え、小町は先に小学校へ向かう準備を始める。小町の小学校は、俺の中学校よりも距離が遠い。俺が中学校へあがった春、最初の一週間の登校では俺が小町を送り迎えしたのだが、その次の週に回覧板で小学生を誘拐しようとする不審者への注意喚起がなされていた時は泣きそうになった。ていうか泣いた。

まあそんなことがあったせいで、小町は俺のことを気遣ってか、一人で家を出るようになった。そのことを小町に聞いたら、お兄ちゃんといるときの世間の目に耐えられない、とのことだったが、小町なりの照れ隠しなのだろう。まさか本心で言っているなんてことはありえるまい。もし仮に万が一本心だったときはもう死のう。そうしよ

う。

＊

異変を感じたのは、俺が帰ってきてからだった。いつも通りゲーセンやら本屋やらで適当に時間を潰し、帰宅したのだが、小町がまだ帰ってきていなかったのだ。いつも小町は先に帰ってきていたはずだが、どうしたのだろうかと、小町の部屋に向かう。

「小町ー。帰ってるかー。」

返事はない。寝ているのだろうか。俺は心配になり、ドアを開ける。

そこに小町の姿はない。時計を見ると、今はもう六時過ぎ。小学生が帰っていないとなれば電話の一つでも飛んできそうな時間だ。

心臓に冷水を垂らされているような感覚がする。不安と心配と恐怖と焦り、多くの感情が混ざり合い、とても気持ち悪い。吐き気がする。

俺は制服のままで小町が行きそうな場所を徹底的に探した。近所の公園、デパート、小町の小学校、俺の中学校。思い当たる場所を全て探し終えても、小町が見つかることはない。

誘拐だろうか、いや、そんな可能性は考えるな。ちょっと遠出をしたら迷子になっただけだ。

「どこ行ってんだよ……！」

息を切らしながら、思わず一人で声を荒げる。その時だった。

―ピロリ

ケータイが鳴る。小町からの連絡であることを願いながら、慣れていないケータイをカチカチと操作してメールを開く。

差出人は…、比企谷小町。件名はなし。

そのメールを開くと、ただ一言。

家出します。

と、メッセージが表示される。

家出する？何故？いや、まず今どこに？

多くの疑問が頭をよぎる。しかしその解は小町以外には知る由もない。

俺は両親にメールを送り、小町を探し続けた。小町には、何本もメールをし、電話だってした。しかし帰ってくるのは常に無機質な留守電対応のみ。メールにも返信はなく、届いているのかすら分からない。

その日から何日、何週間、何か月と経とうとも、小町が帰ってくることはなかった。

第十一話

時刻は三時過ぎ、もう外は冬の面影を残すことはなく、新芽が芽生え、若葉が芽吹き、きたるべき初夏へ向けての準備を始めている。

大都会新宿と言えどもそれらを感じることは難しくない。街路樹や、あるいはアスファルトに生えている雑草でさえも春を感じさせるには十分だろう。

しかし、それら春の暖かさに触れようとも心が暖まることなどなく、冷え切った記憶が、俺を現実へと引き戻す。

この罪科から逃げるなと、忘れることなど許さないと、過去の俺が叫んでいるのだ。

三年経った今でも、何も進めることができていない。三年間もあったというのに、小町自身の情報はおろか、警察や国に対し、圧力をかけられるような組織の話なども全く集まらない。

…その点で考えて、恐らく神崎は、そのような犯罪組織と長い間戦ってきた。たったの三年、素人が調査した程度の情報とは、質も量も段違いの情報を持っているのだろう。

なら、俺は…。

「着いたわ。ここよ。」

神崎の声で思考を中断される。

考えながら歩いていたため気が付かなかったが、目の前のこの建物には見覚えがある。

新宿警察署、日本国内で最大の警察署だ。

ここまで来て、ようやく神崎が何故ここに俺を、俺たちを連れてきたのかと考え始め、また先ほどまでそれを考えられないほど精神的な余裕を失っていたということにも気が付く。

…落ち着け。何度も自問して、自答して、分かっているはずだ。後悔しようと懺悔しようと、小町は戻ってこない。

なればこそ、今は神崎の話を聞かなければならない。信用できるのであれば、彼女は大きな戦力だ。

確か神崎は自分自身が俺に協力する理由を示すと言っていた。気

がする。あの段階で結構心にきてたからあんまり聞いてなかったけど。
一体それはなんなのだろうかと、考えているうちにも神崎はスタスタと先に進んでしまう。
その足取りは、迷いなく、慣れ親しんだ通学路を歩いているかのように淀みない。
恐らくは、彼女は何度もここにきているのだろうと、そう思った。
＊
二人の管理官に見張られながら、面会室に入る。
面会室には長机と、その前にパイプ椅子が置かれてあり、水玉のように穴の開いたアクリル板をはさんで、それらが鏡合わせのように配置されている。
俺たちが面会室に来てすぐに、奥の扉から、これまた二人の管理官に見張られながら、美しい榛摺色の髪の女性が出てくる。顔立ちは整っており、その長い髪や、恐らくは規則で着せられているのであろう無機質な服も相まって、とても落ち着いた印象を受ける。世間一般的にも美人に分類されるだろう。
俺はその女性を見ながら、どことない違和感を感じていた。デジャヴ、とまではいかないが、この人にどこかで会った、あるいはどこかで見たことがあるような気がする…。でも大概ここまで美人な人なら結構印象に残りそうなもんだけどな…。
その女性は神崎と遠山、そして最後に俺を見ると、神崎に目を戻して話し始める。
「まぁ…、アリア、この方たち、どちらか彼氏さん？」
「ちっ、違うわよママ。」
色恋の話題に慣れていない神崎は少し動揺しながらもすぐさま否定を返す。
それにしても、神崎の母親だったのか。見覚えがあるように感じたのはそれのせいだろうか。
ん？母親？
「じゃあ、大切なお友達かしら？へぇ～、アリアもボーイフレンドを作

るお年頃になったのねぇ。昔はお友達を作るのもヘタだったのに、今では二人も…。ふふ。うふふ…。」
母親…、だと？
ありえねぇ…。いや、だがまあ、確かに顔つきはどことなく神崎に似ている。髪や肌の色こそ全く違うが、顔のパーツやちょっとした所作などは神崎そっくりだ。
何故娘が高二にもなっているというのにこの人こんなに若いんだよ。最初に見たとき普通に二十代に見えたぞ…。
でもよく考えると娘の方もまだ中学生みたいなもんだ。そう考えると神崎の家系は成長がかなり遅いのかもしれない。
「違うの。こいつは遠山キンジ、こっちは比企谷八幡。どっちも武偵校の生徒よ。そういうのじゃないわ。絶対に。」
神崎が母親にそう説明すると、神崎の母親は目を細め、こちらに向き直る。
「お二人とも初めまして。わたし、アリアの母で、神崎かなえと申します。娘がお世話になってるみたいですね。」
神崎の母親は、この部屋には不釣り合いなほど柔和な笑みを浮かべ、俺たちに挨拶してくる。
俺はどう返してよいのか分からず、なんとなく会釈だけ返す。遠山の方も俺と同じような心境らしく、どこか曖昧な返事を返していた。
「ママ。面会時間が三分しかないから手短に話すわ。こいつらは、武偵殺しの被害者たちなの。先週、武偵校で自転車に爆弾を仕掛けられていたわ。」
神崎の母親は表情を硬くし、話を聞いている。そのような事柄に慣れていないのだろうか。しかし、ここにいる以上何らかの罪を犯しているはずだが…。
「さらにもう一件、五日前にはバスジャック事件が起きてる。ヤツの活動は、ここ最近急激に活発になってきてるのよ。てことは、もうすぐシッポも出すハズだわ。だからあたし、狙い通りまずは武偵殺しを捕まえる。ヤツの件だけでも無実を証明すれば、ママの懲役８６４年が、一気に７４２年まで減刑されるわ。最高裁までの間に、他もぜっ

たい、全部何とかするから。」
　神崎の言葉で、俺は目を丸くした。遠山もこの話は聞いていなかったらしく、驚いたような顔をしている。
「そして、ママをスケープゴートにしたイ・ウーの連中を全員ここにぶち込んでやるわ。」
「アリア、気持ちは嬉しいけれど、イ・ウーに挑むのはまだ早いわ。…パートナーは、見つかったの？」
「それは…、どうしても見つからないの。誰も、あたしには、ついてこれなくて…。」
　そのやり取りに、俺はいつだか、神崎の原動力とは一体何なのだろうかと、思案を巡らせたことを思い出す。
　不本意ではあったが、神崎と過ごした期間で、神崎のことを多少は知ることができた。
　きっと彼女はとてつもなく優秀な武偵であると同時に、高校二年生にしては少々子供っぽいただの女の子でもあるのだ。どちらか一方がかけただけでも、彼女足り得ないのだと、そう考えていた。
　しかし今、それは思い違いだと確信する。
　彼女が武偵足り得たのは、きっと母親のことを想ってのことだ。彼女は、自分の母親を助けたいと、そう願うただの少女に他ならない。ただ母親ともう一度日常を過ごしたいと、そう願う純粋な少女なのだ。
　なんて、健気で、不器用で、報われないのだろうかと、そう思った。
　たった一人の少女が、母と過ごしたいと願うその思い一つを胸に、パートナーを求めてロンドンからここまでやってきたのだ。だというのにも関わらず、彼女はパートナーを見つけることができずに、たった一人で戦おうとしている。
　…そんな不器用な背中は、昔どこかで見たことがあるような気がした。
「神崎、時間だ。」
　壁際に黙って立っていた管理官が、壁の時計を見ながら無感情な声で告げる。

「ママ、待ってて。必ず公判までに真犯人を全員捕まえるから。」
「焦ってはダメよアリア。わたしはあなたが心配なの。一人で先走ってはいけないわ。」
「やだ！あたしはすぐにでもママを助けたいの！」
二人がそんな言い争いをしていると、二人の管理官が神崎の母親を羽交い絞めにするようにして引っ張り出す。
「やめろッ！ママに乱暴するな！」
神崎がアクリル板に向かってとびかかる。しかし、当然生身の人間にどうにかできるような硬度ではない。アクリル板は少しも歪むことなく、向こう側の光景を映し続ける。
やがて神崎の母親は面会室の奥の扉の、その向こうへと連れてゆかれ、あまりにあっさりと面会は終わった。

＊

「…キンジ、今日は先に帰って。」
待ち合わせ場所のカフェまで戻ってくると神崎は急にそんなことを言い始める。
「…ああ、分かった。」
遠山は納得した様子ではなかったが、特に何を言うでもなく一人で駅に向かっていく。
「…なんで帰らせたんだ。遠山もお前のパートナー候補だろ。」
「これから話す話は、出来る限り隠しておきたいのよ。…きっと、キンジも知ったら命を狙われることになるわ。」
「それを俺に話すってのはどういうことなんだよ。」
「あんたがこの話を聞くべき人間だと判断したのよ。いいから黙って聞きなさい。」
俺は黙ったままでわずかに頷く。
「さっきママと話していたイ・ウーという組織についてよ。とは言っても、あまり多くは語れないわ。そこは理解しておきなさい。」
まあ、大方予想通りだ。小町を探していた三年間で、多くの組織を調べたのだ。だというのに、イ・ウーというのは俺が聞いたこともないような組織だ。間違いなく裏社会、それもかなり深い部分のものだ

ろう。
「イ・ウーという組織は、世界的に巨大な戦力を誇る秘密結社の名称よ。やつらの目的は不明。ただ、強力な超能力者を集めているという話を聞いたことがあるから、恐らくは巨大な戦力を集めて、奴らに都合の良い世界を作るとか、そんなところだと思う。」
「漫画みたいな話だな。世界征服を狙っている秘密結社とは…。で、それが何で俺に話すべきなんだよ。」
「…あたしの直感では、イ・ウーが、あんたの妹の失踪に関わっているわ。」
そう言うと神崎は、少し不安そうに俺の目を見てくる。なんだよ。なんでちょっとしおらしくなってるんだよ。
まあ実際、直感というのは少し理由としては弱いが、冷静に考えてそこまで深い部分の組織でもなければ、既に俺が見つけていたり、神崎が潰していたりしそうなものだ。そう考えれば、確かに調べてみる価値は十分にあるように思える。
「なるほどな。まあ事実がどうであれ、調べてみる価値はあるな。」
俺がそう言うと神崎は一瞬だけ安堵したような表情をして、その後すぐに真面目な表情に戻る。表情筋さん忙しそうっすね…。
「じゃあ、この話はここで終わりよ。」
次に、と神崎は続ける。
「言ったわよね。あんたが本気を出さない理由を当てたらアタシのドレイになるって。」
覚えている。それは二週間近く前に、神崎とコンビニへ向かった時に話した話だ。
「確かに、話したな。」
なんとも歯切れの悪い返答を返すと、神崎は一気に表情を険しくしてこちらを睨んでくる。
「…まさか、あんた今更あれはなしとか言うつもりじゃないでしょうね！あんたのことを信じたから、あたしは今日のことだって話したのよ!?」
違う。違うのだ。もはやそんなことを言う気など微塵もない。

ただ、彼女と彼女の母親が話していたそれを、聞いてしまった。
神崎が真に求めているパートナー、それは神崎アリアという人間を理解し、神崎と世間をつなぐ橋渡しになれるような人間、そして何より、神崎アリアに合わせられる人間。
…そんな条件の上で俺を選ぶなんていうのは、妥協だ。俺が忌み嫌う、ただの欺瞞だ。
神崎アリアはきっと、どこか俺と似ている。家族を失い、ただ当たり前にそこにあったはずのものを取り戻さんとしている、ただの子供だ。
だが、だからこそ浮き彫りになってしまうのだ。俺と彼女では、本質が大きく違う。
神崎アリアは真っ直ぐに、理想を見続け、進み続けた。
俺は捻り歪んで、過去の自分に押しつぶされないように、逃げ続けた。
そんな人間が、神崎アリアを理解など、出来ようもない。神崎アリアと世間をつなぐ橋渡しになど、なれるはずもない。
「…お前が探してたパートナーってのは、俺じゃない。大体、お前だって誰でもいいわけじゃないだろ。俺じゃお前の…」
「うるさい!!」
俺が言おうとしていた言葉は、神崎の一言によって遮られる。
「あんたに何が分かるのよ!あたしだって誰彼構わずパートナーに誘ってるわけじゃない!あんただから…、あんたたちだから誘ったのよ!それなのに…」
それ以上は言葉になっていなかった。感情が決壊してしまったかのように神崎の目からは涙が溢れ、頬を伝ってゆく。
神崎は流れるそれを乱雑にぬぐい、俺を睨みつけると駅の方へ走り去ってしまう。
追いかけなければいけないと、そう思った。だが、足が動くことはなく、俺は神崎が人混みの中へ消えてゆくのを黙って眺めていた。
気付けば固く握られていた拳はしびれ、力を抜けば、みるみるうちに冷えてゆく。

俺は改札を抜け、電車に揺られた。
窓から時たま見える夕焼けが、いやにまぶしく、目を閉じた。
そのまま意識を手放してしまおうという、その思いとは裏腹に、益体もない思考ばかりが瞼の裏でぐるぐると回る。
間違い探しはいつまでたっても答えを見つけることはなく、ただ、また間違えたのだという実感だけが、胸に残った。

第十二話

「理子と付き合おうよ！ハチくん！」

放課後、日はまだまだ落ち切ることはなく、季節の移ろいが感じられる。

そんな斜陽の差し込む無人の教室で、俺は一人の女子に告白を受けていた。

目の前に立つ少女は、見覚えがある。

フリフリに魔改造された制服、その主張の激しい制服に負けず劣らず派手な、しかしどこか高貴な印象を受ける綺麗な金髪。

この武偵校随一の魔性の女（俺調べ）と噂の峰理子さんである。

その見た目に違わず、普段は結構頭の緩そうな言動を繰り返しているが、こいつのそれは間違いなく狙ってやっていることでも有名（俺調べ）である。いわゆるぶりっ子というやつだ。

とはいえ、彼女自身の交友関係は基本的に女子が多い。男子と話していることもあるが、多くの時間は女子と関わっている時間の方が多いように思う。

それらの交友関係から察するに、男子に好かれたくて可愛い自分を演じているというよりは可愛い自分が好きなタイプなのだろう。

しかしまあ、男子から見ればそんな違いは些細なものだ。特に、モテない男子からすれば、可愛い女子が話しかけてくれた。という事実だけを受け取り、その可愛さが自分に向けられたものだと勘違いする。そしてその結果告白とかしちゃって、次の日の話題を独り占め。教室中が俺のフラれた話で持ち切りだったりするのだ。

少し話が逸れたが、まあ要するに、可愛い女子からの告白は信じるな。ということである。

大体にして大して話したこともない女子が告白してくるとか罰ゲームでしかありえないだろ。そのいたずらで何人の俺が犠牲になったかわかってんのかよ。ちなみに正解は三人。

そんなめちゃくちゃ個人的な怒りも込めつつ、この罰ゲームを台無しにしてやろうという意思の元、考えうる限りつまらない回答を心が

ける。
「あー、すみません。ちょっとそういうの無理なんで…。」
言外に罰ゲームであることはわかっているぞという意味を含ませながら、俺は峰にそう告げる。
こう言えば大体の場合はあー、やっぱそうだよねー。ごめんねー。と言ってどこかへ去っていく。この際に校舎の角に入って行き、きゃいきゃいと話し始めれば完全に罰ゲームは終了。
このシチュエーションであれば、彼女がこの屋上へと続く扉をくぐれば俺の仕事も終了と考えてよいだろう。全く、罰ゲームも楽じゃないぜ。遊ばれる側だけど。
「あー！今ハチくん理子が嘘で告白してると思ってるでしょ！」
しかし意外にも峰は引き下がることなく、むしろ少し怒ったような顔でこちらに近づいてくる。
なにこれ面倒臭い…。こいつ俺に何を求めてるんだよ。叩いても黒歴史くらいしか出てこないぞ。
「いや、思ってないんで、ほんともう、いいっすか？自分忙しいんで…。」
「ダーメー！」
彼女はそう叫ぶと、俺の腕に抱きついてくる。
「理子本気だもん！本気でハチくんのこと好きなんだもん！」
そんな事を言いながら、峰はぐりぐりと腕を自らの胸に押し付ける。
この所作一つ一つが全て自らの可愛いの演出だと考えると恐ろしいことこの上ないな。並の男子だったら三回は堕ちてる。
それにしてもなんなのこいつ…。邪魔だし鬱陶しいし意外と柔らかいし…。
俺が黙ったままでいると、本気で嫌がっていることを察知したのか、先ほどとは一転して不安そうな顔でこちらを見つめてくる。
「もしかして…、ハチくん、理子のこと嫌い…？」
「普通に苦手だし嫌い。」
「ガーン！理子ショック！」

峰は俺から離れると、急激に先ほどまでの元気をなくし、そのまましゃがみ込むと、指で屋上の床をいじいじし始めた。
いやそういうオーバーリアクションな感じのところがね？相手してて疲れるというか普通に面倒臭いというか…。いやマジで面倒臭いな。黙って帰っちゃおうかな…。
しかしそんな悲壮感たっぷりの様相は長くは続かず、峰は何かを閃いたようにこちらに向き直る。
「でもでも、じゃあ理子が今からハチくんのことメロメロにしちゃえばハチくんは理子と付き合ってくれるんだよね！」
何言ってんのこいつ。ここまではっきり言われてまだ付き合うという結果に向けた行動をとれるってどんなメンタルしてんだよ。
「あのな、確かに理論上はそうかもしれんが、そう簡単に変えられるもんじゃないだろ。人の心とか、ひん曲がった性根とか、腐った目とか。そういう本質的な部分で俺はお前に苦手意識を持ってんだよ。」
「大丈夫！理子、合わせられるタイプだから！」
峰は両手の人差し指と親指を合わせて丸を作ると、それを目に当てて眼鏡のようにする。もはやそれ何を表してるんだよ。
「いや、だから合わせられるとかじゃなくてね…。」
というか、もう既に俺の好みには合ってないんだよなぁ…。
こいつに俺の言いたいことを伝えるためにはどれくらい偏差値を下げたものか…。
俺がそんなことを考えている間にも彼女は勝手に話を進めていく。
「ハチくんは今はアリアのこと好きかもしれないけど、そのうち理子の魅力にメロメロに…。」
唐突に出てきた神崎の名前に、この前の土曜日に感じた気持ち悪さが胸から這い上がってくる。
「…別にそういう関係じゃねーよ。」
ただその一言だけ絞り出す。
そういう関係とは、どういう関係なのだろうか。どういう関係だったのだろうかと、思考の波にのまれかけていると、目の前で目を輝かせている峰に気付く。

「じゃあハチくんの心は今フリーってこと？」
フリーといえばフリーだな。というか人間関係の全てがしがらみだと考えるのであれば俺はこの学校では誰よりもフリーダム。独身貴族という言葉があるが、もはやここまで人間関係薄いと貴族超えて王族まであるので、フリーダムってよりもはやキングダムかもしれない。境があるから敵ができるんだ…。
というかこいつ、さては適当に流してても帰ってくれないな？
こうなれば比企谷八幡１０８の特技の一つ、人との会話を終わらせる。を使うしかない。
作戦は簡単だ。この場合、相手が全く知らない架空の彼女がいるということにする。そうすることでこの不毛な問答もろとも全て「いや、でも俺彼女いるから…。」という一言だけで乗り切れるのだ。
フハハ、残念だったな峰。この地獄のような罰ゲームもこれまでだ！
「フリーじゃない。俺には中多紗江という彼女がいる。」
「紗江ちゃん派か～。理子は逢ちゃんのが好きだな～。」
なん…、だと…？
え、嘘だろお前、ア○ガミとかやるのかよ。そんな方向性で見抜かれるとは思ってなかったわ。
陽キャの女子ってバイトとショッピングと男漁りしかしてないんじゃないの？
「いや待て、ていうかまずなんでそんなに俺に執着するんだよ。何が目的だ。」
「もちろん最終的には理子のスキエンドを見てほしいってゆーのが目標！」
胡散臭ぇ…。絶対なんか企んでんじゃんこいつ。正直怖いからこれ以上話したくないんだけど…。
そんな思いが顔に出ていたのか、峰は不満げにぷくーっと頬を膨らませる。
「付き合ってくれてもいーじゃーん！理子、ハチくんのネタとかも六割くらいは打ち返せる自信あるよ！」

何その妙にリアルな数字…。しかも六割って普通に返ってこないことも多いだろ。あんまり人と話したことないから知らんけど。
しかしまあ、本人が半分以上は伝わると豪語しているのだ。少しこいつを試してみよう。
「じゃあ分かった。じゃあお前が火鼠の皮衣を持ってきたら考えてやろう。」
「理子それ知ってる！犬○叉が着てたやつだ！」
うーん、ちょっとずれてますね！
伝わってれば実質的なノーセンキューの言葉として認識してくれていたかもしれなかったのだが…。
…いや、むしろそうなることを予見していたのかもしれない。犬○叉のネタだと解釈し、先んじて言うことでノーセンキューというメッセージである可能性をゼロに変えた。
おいおいマジかよ。こいつめちゃくちゃ取引上手いじゃん。
流石の俺も今の一瞬でそんなに深く考えて動かれちゃ勝てる気しない。
思考力でボッチが後れを取るとは…。これも陽キャ間のコミュニケーション能力の一種なのだろうか。
陽キャの洗練された会話操作の能力に勝手に戦慄していると、峰はおもむろにケータイを取り出してポチポチし始める。
つかなんつーとこにケータイ入れてんだよ。今胸からケータイ出しただろ。
一応華の女子高生だろうに…。下着見られるかもとか考えないのかよ。
ちなみに黄色のフリルっぽいやつだった。何がとは言わないが。
そんなことを考えていると、ケータイを見ていた峰が申し訳なさそうな顔をする。
「ごめんねハチくん。理子、ちょっとご用事できちゃった…。」
マジ？用事ができたってことはつまりそっちに行かなきゃいけないってこと？
良かったー…。こいつマジで何考えてるのかわかんなくて怖かっ

たよー…。
次こいつが話しかけてきたら話しかけないでください、あなたのことが嫌いです。とか言って断ろう。どこのカタツムリ小学生だよ。
「じゃあハチくん、また今度お話しようね！」
そういうと、俺の返事も待たずに屋上を後にする。
一人になって、先ほど無理やり飲み込んだ気持ち悪さが、もう一度這い上がって来る。
峰が去っていく後ろ姿を、ふと土曜日の神崎と重ねてしまっていた。
…また今度、お話か。
俺も彼女も、会話は苦手だ。
俺は言葉を、相手を信じることができない。言葉にすれば自分の思いが１００％伝わるなんてのは、１００％在り得ない。
間違えて、失ってしまった。
なればこそ、これでそのまま失ってしまうのならそれまでだと、そう思う。
だが、そう思っても行動しなければいけないのだ。
失うことを許容することは、小町を失うことを許容するということに他ならない。
それは、過去の俺も、今の俺も唯一変わらずに持っている、ちっぽけな、家族として、兄としての矜持だ。
話がまとまらずとも、うまく伝えられぬとも、行動しないことは、過去の自分への裏切りだ。
だからきっと、近い未来に俺はあいつとお話とやらをするのだろう。

第十三話

会話とは、読んで字のごとく会って話すというその行為を指す言葉だ。

この行為は、個よりも全を優先する人間社会では必須となってくるコミュニケーション手段の一つであるのだが、当然それらが苦手な人間もまたその社会には存在するのだ。

例えば、授業直前まで教室に入ってこず、授業が始まればこれでもかと机の端に教科書や筆箱を重ねてウォール・マリアならぬウォール・アリアを形成し、昼休みになったとたん脱兎のごとく教室を飛び出してゆく赤髪赤目のちっちゃい高校生とかである。

いやほんとに勘弁してほしい。俺も大概話しかけるの苦手なんだから、その上さらに話したい相手に逃げられちゃ八幡君諦めちゃうぞ？もぅまぢムリ…帰宅しょ…。

…まあ、こと最近に関しては会話を阻害しているものが他にもあるのだが。

＊

「そういやお前、最近理子と仲いいんだな。」

寮に帰り、ソファでグダグダしていると、帰ってきた遠山が急にそんな話をし始める。

「いやいや全然全く仲良くないけど、なんだよ急に。」

「そうなのか？最近教室でよく話してるじゃねーか。それが意外だと思ってな。」

そう、俺が神崎との会話に踏み出せない理由の一つとして、峰の存在がある。

ここ最近のあいつは、休み時間になったら飛び出していく神崎の席に座り、なんやかんやと話しかけてくるのだ。

マジで本当に怖い。一日だけとかならまだしも、その後もずっと続けて絡んでくるというのは、明らかに何か計画的な犯行に関わらされている。

「…まあ確かに意外だな。っても、あれは仲良く話してるって感じ

じゃない。あの女何か企んでる絶対に。だからまあ、俺はその片棒を担がされてるって感じだな。」
「あの理子が何かを企めるとは思えねーよ。意外と普通に気に入られてるんじゃないのか？」
「それだけは絶対にないな。企んでないとしても、気に入られるわけがない。」
　あんまり話したことのない女子が自分を気に入ってくれるなんてのは漫画やアニメの世界だけだ。実際は、話したことのない奴はそれ以上でもそれ以下でもなく、ただただ興味のない人種という、ただそれだけの話だ。だからもう勘違いして告白するのはもうやめような、俺。
「お前がそう言うんだったら別にいいけどな。実際気に入られてた時は誰も幸せにならないぞ。」
「幸せなんてのはあくまで付加価値だろ。誰も不幸にならない、損失が生まれなければそれで十分だ。」
「分かった分かった。もう言わねーよ。」
　遠山は超面倒臭そうに声を上げる。ごめんね面倒くさくて。
　ジャケットを脱いで楽な装いとなった遠山は、俺の隣のソファに腰掛ける。
「あ、そういえば。」
　飲み物でも入れてやろうかねと考えていると、遠山が何か思い出したかのように声を上げる。
「アリアとなんかあったのか？」
　気付いてたのか…。いや普通気付くか。ワンチャンあまりに鈍感すぎて気付かない可能性にかけていたのだが。
　さて、どう答えたものか…。正直にすべてを話せれば楽なんだが、それではわざわざ遠山を先に帰した神崎の気遣いもなにもあったもんじゃない。
「…これから何もなかったことにする予定。」
　悩んだ末に、とりあえず何があったかという点には触れずに、これからやることについて話す。面接とかでよく使う手段だ。

「バイトの経験はありますか？」と聞かれ、「ありませんが、今後様々な仕事をしていくうえで、その多くを学んでいければよいなと考えています。」と答えるみたいな。ちなみにそのバイトは落ちた。
「なんじゃそりゃ。」
「俺にも分からん…。」
いつ何をどうするか、５Ｗ１Ｈ何一つとして判然としていないが、何もなかったことにするというその結果だけは妙にはっきりと見えている気がする。
まあ要するに、全く持って根拠はない。
「どうにかなりそうなのか？」
「多分。知らんけど。」
「ならまあ、多分大丈夫だな。」
「そんな簡単に信じられても…。」
そんな簡単に人を信じてると後悔するぞ。オレオレとか、そうじゃなくても詐欺とかめちゃくちゃ多いしな。
ちなみに俺くらいになるとオレオレどころか名前を言われても金を貸せるレベルの友人知人がいないので絶対に引っかからない。
「お前がちゃんと仲直りしてくれないとあいつがまた俺にドレイになれとか言ってくるからな。ちゃんとやれよ。」
「…俺はあいつのドレイにはお前の方が適任だと思ってるけどな。」
心底そう思う。こいつの入学試験は、今でも鮮明に思い出せるほどに鮮烈だった。
抜き打ちで隠れていたプロの武偵もろとも、受験生とまとめて捕縛した。あの瞬間に、俺は絶対的な力というものを感じた。
その俺の住んでいる世界とは隔絶された、戦場を見ているような感覚は、未だに胸に焼き付いている。
格好良く言ったが、実際にはマジで何されてるか分からんかった。本当に意味不明。分からん殺しを現実でやられるとは思わなかった。
しかし、そんな俺の思いもつゆ知らず、遠山は全くその差を意識していないかのように話を続ける。
「俺たちは落ちこぼれ二人組だろ？どっちも大して実力が変わらない

なら、現状あいつに気に入られてる奴がなる方が必然だ。」
皮肉かよ、入試Sランク武偵さんよ。
とはいえ、一年の頃から、より正確に言うなら入学してからこいつは一度としてその力を使ったことがない。
事情があるのか、それともいつだか言っていた力を出す条件によるものなのか。
どちらにしても、俺と似たようなものと言えばそうだ。
そう言った意味合いで言えば、落ちこぼれ二人組というグループで分けられるのも納得できる。まあ、本気の時の能力には天と地ほどの差があるが。
「ならお前だな。俺は今ちょうど気に入られてない。」
「あれは気に入られてるだろ。俺でも分かるぞ。」
いや、お前女子の気持ち全くと言っていいほど分からんだろ。俺も分からんけど。
「…あいつさ、お前のこと調べてる時も俺に声かけてきてはいたんだよ。ドレイになれってな。」
「なんだよ急に。」
「まあいいから聞けよ。…だが調べていって、お前の事情に見当がついてからは、一切言われなくなった。その時はなんでか分からなかったけどな。でも、この前の土曜に、アリアが俺を先に帰らせただろ？それは多分、アリアが自分のパートナーを探すだけじゃなく、個人として比企谷八幡の力になりたいと思ったからなんじゃないかと、俺は思う。」
「…都合よすぎるだろ。信じられねえよ。第一、お前女子の心情とかめちゃくちゃ苦手じゃねーか。」
「まあな。女子は分からん。」
ただ、と遠山は続ける。
「お前のルームメイトなもんでな。お前を助けたい奴の気持ちはなんとなく想像できる。」
…お前、格好良すぎんだろ。
普段は昼行燈とか言われちゃいるが、意外と周りを見ているもん

だ。見事に言いくるめられてしまった。
「…まあ、元々どうにかしようとは考えてる。多分、また前みたいに戻るだろ。」
「お前俺の話聞いてたか？」
「え？いやだから、さっさと仲直りしとけよって話でそ？」
俺の言葉を聞いて、遠山はハァ～とアホみたいに大きなため息をつく。
え、何？バカにしてる？さすがの温厚なで有名な八幡さんでもそれはキレちゃうよ？
全校生徒にプロ武偵合わせても勝てないんだよなぁ…。一発不意打ちで殴るくらいはできないだろうか。
「俺が言いたいのは、多分アリアは別に前みたいな関係に戻りたいわけじゃないってことだ。」
「つってもな…、俺はあいつのパートナーにはなれない。」
「まあ、そう言うと思ったよ。ふさわしくないとか考えてんだろ？」
いやまあ、ふさわしくないというか相対的に俺より優秀な人間が世の中にはいっぱいいるわけだし…。うん…。超面倒臭いな俺。
俺が沈黙していると、その沈黙を肯定ととらえたらしく、遠山は話を続ける。
「お前のことだから、俺が何言っても、パートナーにはならないだろうな…。」
「いや、まあ、うん。そうね…。」
いや正解なんだけどね。自分のことをこうも分かられているっていうのはなんかちょっとこう、怖いというか気持ち悪いというか。…どうにもむず痒い。
「だけどな、パートナーじゃなくても、手を貸すぐらいはするだろ。ここは武偵校だ。もしも同じ事件に巻き込まれちまったら協力して解決する。それがどんな関係だろうとな。」
「…結局何が言いたいんだよ。」
「話す内容くらいは決まったか？ってことだ。何も決まってなかったんだろ？」

全く、全部見透かされてんのかよ。本当にお手上げだ。
「なんつうか、悪かったな。余計な気使わせて。」
「気にしてねえよ。むしろ、お前は普段が気使わなせすぎなんだよ。」
そういうと遠山はソファから立ち上がり、自室へと戻っていく。
「…ありがとな。助かった。」
自分の口から出た言葉は、ともすればつぶやき程度の声量だったが、遠山には聞こえていたようで。
「…いやお前にお礼言われるって、なんか気持ち悪いな。」
「そいつは悪うございましたね…。」
…やはり一回殴った方が良かったかもしれない。

第十四話

先日遠山に言われた言葉を思い返す。話す内容は決まった。というより、そんなことも決められていなかった自分に驚いた。

今まで、話さなければいけないという意思はあれど、俺には神崎が何を考えているのか、正直さっぱり分からなかった。まあそれに関しては今もちゃんと分かっているとは思えないが。

だがそれでも、遠山から聞いた事を信じるのなら、なんとなく想像することは出来る。

話すことも、話そうという意思もある。となれば、多少強引にでも話に行ける気がする。知らんけど。

俺はコミュ障というわけじゃない。用事があれば話せるのだ。出来ないのは雑談と気を使った会話だけ。雑談とかマジで何話せばいいんだよ。もっと何話すか明確に決めろよ。

まあ、そんな思いを胸に登校したは良いものの、今日神崎は学校へ来ていなかった。マジかよ…、俺今日は結構確固たる意志を持って登校したのに…。

また何か任務をこなしているのだろうか。その如何は分からないが、今日神崎が学校へ来ていないということは、だ。つまり神崎と話すためには女子寮に行かねばならない、ということになる。

よし、今日はやめよう。いや流石に無理。女子寮とか俺が行ったら問答無用でしょっぴかれるだろ。しょっぴかれるだけならまだしも貼り付けにされて火あぶりになる可能性すらある。…いや普通に冗談にならない。ここ武偵校だしガチでありそう…。怖すぎるだろ。

第一この学校の女子寮とかどっかにブービートラップ仕掛けてあってもなんら不思議ではない。いや、それは男子寮も同じようなもんだな…。

まあどちらにしてもちょっと行きたくないなぁ…。と考えていると、ふと遠山が神崎の連絡先を知っていたことを思い出す。確かこの前のバスジャックが解決した後に連絡を交わしていたはずだ。

そうなればとりあえず今日帰ったら遠山に聞いてみよう…。

「隙ありぃぃぃぃ!!!」
考え事にひと段落つけていると、とんでもなく暑苦しい声と共に、声以上に暑苦しく鬱陶しいものが突進してくる。
しかし何の礼儀なのか、しっかりとセリフを言い終わってから突進してきているせいで全く当たる気はしない。
俺はその猪のような暑苦しい何かをギリギリ避けましたよ感を演出しながら躱す。うおー、あぶねー。
「ほう、今のを避けるか…。流石は我が宿敵、比企谷八幡!!!」
「…前から思ってたけど材木座、お前何かする前に発狂するのやめろよ。周りから変な目で見られるし、相手には完全に動き読まれるしでいいこと何もないだろ。」
「ムハハハハッ、バカを言うでないぞ八幡。この我の一撃、もしも貴様が掠りでもしてしまえば、貴様の脆弱な肉体など一瞬で木っ端微塵で即死だ。流石の我も死者蘇生はドラ○エと遊○王以外ではやったことがないからな。」
「お前さっき今のを避けるか…、みたいなこと言ってたじゃねーか。」
「当然だ。繰り出す一撃は常に相手を殺すつもりで、というのが我の信条だからな。」
言いながら、格好いい事言ったぜ…、みたいな顔をしているこの鬱陶しい男は材木座義輝。
俺と同じく、この強襲科で平塚先生グループ常連の落ちこぼれである。
強襲科を受験し、受かったということが信じられないほど緩んだ肉体に、何よりその痛い言動。当然グループを組むようなことがあればあぶれるのは当然であり、あぶれれば必然的に余りもの同士でペアを組むしかなくなる。
そんな調子で、…誠に遺憾ながらあれよあれよと知り合いになってしまったのがこの材木座義輝である。
「時に八幡よ。」
「なんだよ。」
徒手組手もそこそこに、小休止を取っていると、材木座が話しかけ

てくる。
「いやただの噂だぞ？ただの噂なんだがな？お前が最近あの神崎アリアと仲良くしているという噂を聞いたのだ。いや当然お前に限って女子と仲良くできるなぞそんなことはあるまいと思ってはいる。だがどうにも気になってな。真偽のほどをこの我自ら確認してやろうと思ってな。一応言っておくが本当に絶対在り得ないとは思っているのだぞ？」
「いや、どこ情報だよそれ…。」
　とは言ったものの、確かあいつも友達少なかったな…。それでいて結構注目されやすいから、必然的に一緒にいる人間というのも注目されやすいのかもしれない。そう考えれば、そういう噂が出てくるのも納得できる。
「そんなもん真っ赤な嘘だ。別に仲良くねーよ。」
　俺がそう言うと、材木座はほっと胸を撫でおろす。かと思うとすぐさまこちらに笑みを向けてくる。
「モハハハハ！そうであろうなぁ！お前のような男が仲良くできるのであれば別に我でも良いもんなぁ！我てっきり貴様が我の知らぬうちに大人の階段を上らんとしているのかと考えてしまったわ。いや全く、そんなこと不可能に決まっておるのになぁ。そのようなことに頭を悩ませていた過去の我が滑稽で仕方がないわモハハハ！」
「うぜぇ…。」
　こいつは後で一回殴ろう。二回でもいい。いや三回か？うん。まあいいや、マジでぼこぼこにしてやろう。
　心底愉快そうにモハモハ笑う材木座の隣で俺が心底不愉快そうに顔をゆがめていると、組手再開の笛が鳴り、その直後に体育館へ響き渡った平塚先生のスピーカー越しのアナウンスに、館内の空気は一気に殺意を交えたものへと変わる。
「ここからは武器の制限を解除する！銃や刀剣、爆弾も何でもあり！両者ともに相手を殺すつもりでかかれ！」
　その言葉に、ウォオオオオオオオオオオ！と生徒たちは沸き立つ。
　俺の隣にいた材木座もまた、武器の制限解除に心が沸き立っている

らしい。クックック…、と気持ちの悪い声をあげながら立ち上がり、こちらへ指をさしてくる。
「八幡よ…。死にたくなければそこで座っていろ…。我は呪具を持ってしまうと手加減が出来ぬ…。貴様を…、殺したくはない。」
そういうと材木座は常に腰に掛けている太刀を抜く。いつも思うけど持ち手のところに巻いてあるあの包帯邪魔じゃないんだろうか。めっちゃひらひらしてるけど。
俺武器あり嫌いなんだよなぁ…。主にこいつがもっとうるさくなるから…。
まあいつも通り適当にいなしてればすぐ疲れてダウンするだろう。そしてそこから流石は我が永遠のライバル…、ガクッとか言って倒れるまでがテンプレである。
あ、いや待てよ、閃いた。別にやましい事ではないので通報はしないでほしい。ただ疲れたこいつを竹刀かなんかで一発ひっぱたいてやるのも良いかもしれないと思っただけだ。
その日体育館には一人のボッチの絶叫が響き渡ったそうだ。
ちなみに、そのボッチは普段からやかましい奴だったらしく、痛みで悶絶しようと誰も興味を持つことはなかったそうだ。ドンマイ、材木座。
＊
放課後、何故か妙にすっきりした気持ちで帰路を歩く。
いやー、何故かは分からんけど放課後からずいぶん気分がいいな。うん、何故かは分からんけど。
まあ実際、材木座のことを抜きにしても、だ。ここ最近峰に付きまとわれていたが、今日は見つかることなく帰れた。どうやってるのか知らんがあいつ帰ろうとしている俺をどうあっても見つけてくるのだ。マジで怖いよ。どこから何に気を付けて見てればそんなにすぐ見つけられるの。
寮へ帰り、部屋を見回すが、遠山はまだ帰ってきてはいなかった。今日は用事があるので、メールの一つでも入れておこうかと、ソファに横になりながらケータイを開く。

しかし、ここ最近神崎関連であまりよく眠れていなかったこともあり、ソファに横になるとすぐさま眠気が襲ってくる。
…まあ、結局実際に話をするのは明日になるのだ。あいつが帰ってきてからでも良いだろうと、俺はそのまま目を閉じた。
覚醒した意識の中に真っ先に飛び込んできたのは無機質なケータイのバイブレーションだった。
ケータイを開くと、見知った名前で電話がきている。珍しいな。あいつがわざわざ電話するとは。
「もしもし、どした。」
俺が応答すると、電話の向こうからは風を切るような音と、荒い息遣いが聞こえた。
「比企谷か！」
「お、おう。どうしたんだよ。なんか事件か？」
「…事件はまだ起きてない。だが、これから起こるんだ！絶対に！」
「落ち着いて状況を報告しろ。何言ってるかさっぱり…」
「羽田の第二ターミナルだ。今から急いで来い！」
遠山の荒げた声に、思わず言葉を飲み込んだ。
「武偵殺しが、現れる！」

第十五話

遠山に言われ、羽田空港の第二ターミナルへとやってきた。
着いて早々に目に入ったのは、ターミナルを武偵徽章で突破している遠山の姿だった。
俺もそれに習い、ターミナルを突破し、遠山の後を追い、飛び込むようにして機内へ入る。
駆け込み乗車はよく注意の対象とされているが、この場合はＣＡさんとかに怒られるのだろうか…。
機内は俺が想像していたよりも落ち着いた様相で、電話で聞いていた遠山の声といまいち結びつかない。
騒ぎが起こっているようには見えないがなぁ…、と辺りを見回していると、遠山を見つける。
膝に手をつき、肩で息をしている。どこから来たのかは分からんが、その様子から見て相当焦って来たのだろう。
そんな遠山の様子に、こちらも気が引き締まる。
「おい、遠山。」
「比企谷！来てくれたか！」
「状況説明頼む。何が起こった？」
「一から説明してる時間はない。要点だけ話すぞ。まず、この飛行機にはアリアが乗ってる。ロンドンへ帰るためだ。そして、この飛行機は恐らく武偵殺しによってジャックされる。アリアが狙われてるんだ。俺たちはアリアを守らなきゃいけない。」
息を切らせながら遠山はそう説明する。
うん。まあね？時間がないのも仕方ないことだし、だから要点だけ説明するのも全くもっておかしいとは思わないけどね？
流石にちょっと意味わからないんだよなぁ…。
「いやすまん、流石に…」
いくつか質問させてくれと言いかけた所でバランスを崩しそうになる。
別に急いで来て疲れたとかではない。飛行機が離陸へ向けて動き

始めたためだ。
直後、2階から降りてきたアテンダントがめちゃくちゃビビりながら遠山に声をかける。
「あ、あの…だ、ダメでしたぁ。き、規則で、このフェーズでは管制官からの命令でしか離陸を止めることは出来ないって、機長が…。」
どうやら遠山が先んじて離陸中止を促していたらしい。話を聞くに、失敗に終わってしまったらしいが。
「遠山、今から止めるのは逆に危険だ。もう滑走路まで行っちまってるし、かなり速度も出てる。」
「クソッ！仕方ねえ。一度合流するべきだな…。」
アテンダントを落ち着かせ、この飛行機に乗っているらしい神崎の個室まで案内させる。
階段を上り、そして二階の中央通路を進んでいく。
中央通路の左右には、かなり間隔の広い扉が十二室分。
見たら分かる。高いやつやん。
これ確かテレビで見たことあるな…。空飛ぶリゾートみたいに言われてた、超が着くほどの高級旅客機だ。しかもこれ確か新型だった気がする。
遠山の言葉を信じていなかったわけではないが、少なくとも神崎がこの飛行機に乗っている。というのは間違いではないだろう。
あの子、とりあえず高い物選んどけば間違いないみたいに考えてるとこあるから…。
まあことこの飛行機に関しては値段分の価値があるし、とりあえずで選んだとは言いきれんが。
扉を開けると、座席に座っていた神崎がこちらに目を向け、次いでその目を丸く見開かせる。
「あ、アンタたち、なんでいるのよ！」
「…流石はリアル貴族様だな。これ、チケット片道二十万くらいするんだろ？」
遠山は神崎の質問には答えずに、全く関係のない話を始める。
この様子からするに、神崎が狙われてるって話を、その本人は知ら

ないようだ。
「断りもなく部屋に押しかけてくるなんて失礼よ！」
「お前にそのセリフを言う権利は無いだろ。」
いやもう本当にそう。お前が言わなかったら俺が言ってた。
こいつ押しかけるどころかデカいトランク持ってきてそのまま住み着いたからな。俺らの方がマシまである。
「…なんで来たのよ。」
神崎はチラリと俺を一瞥すると、遠山へ向き直ってもう一度質問をする。
「太陽はなんで昇る？月はなぜ輝く？」
しかし遠山は答えない。むしろ挑発するようにいつだか神崎に言われたことを繰り返す。
「うるさい！答えないと風穴あけるわよ！」
そんなことをすれば煽り耐性０の神崎さんが怒髪天つきまくりになることは想像に難くない。もしこいつがサイヤ人であれば、かの悟空さよりも早くスーパーサイヤ人になれていたのかもしれない。威嚇しながら息をするようにスカートの裾へと手を伸ばす。何度も見た、銃を太もものホルスターから取り出そうとする動きだ。
…こんな飛行機乗る時にも帯銃してんのかよ。全くもって筋金入りの武装探偵さんである。
「武偵憲章２条、依頼人との契約は絶対守れ。」
遠山が呟くように告げる。
「……？」
神崎は意味がよく分からないらしく、怪訝そうな顔をしている。ちなみに俺も今同じ気持ちである。
「俺はこう約束した。強襲科に戻ってから最初に起きた事件を、一件だけ、お前と一緒に解決してやる。武偵殺しの一件は、まだ解決してないだろ。」
「……。」
神崎は不服そうにしながらも、黙っている。表情的に、確かにこいつの言ってることは筋が通ってる…。でもなんか言いくるめられて

るみたいで気に入らない！何か言い返したい！ぷんすこぷんすこ！
と言った所でしょうか。神崎嬢。
「な、なら、なんでそれにハチマンを呼んだのよ。関係…、ないはずだわ。」
神崎は俺をチラと見やり、そう言った。
「すぐ来れる、かつ使える戦力と判断した。だから呼んだ。これ以上の理由はないだろ。それとも、使える戦力が現場にあるのに使うなってか？」
その遠山の言い回しに、神崎は眉をひそめる。
「ちょっと待ちなさい。戦力？現場？アンタの言い方、まるで事件が起きてるみたい。」
「…起こるんだよ。これから、お前を狙ってな。」
「それってどういう…。」
神崎が質問するのを遮るように飛行機が大きく揺れる。
「…すまん比企谷、ここ任せる。今からでもどこかに着陸出来ないか、機長に直接掛け合ってくる。」
「あ、おい！」
声をかける間もなく、遠山は走り去っていく。
使える戦力が、現場に、か。
あまり信用されても困る。俺は確かに授業で手を抜いている。だが、本気を出せば最強なんて、そんな都合の良いことはありえない。むしろ、授業で手を抜いている分、もう本気でやっても追いつけないほどに周りとの差が開いているのではないかと感じる。
…ただそれでも、まだ武偵だ。
神崎のことから、事件のことへと頭を切り替える。今は神崎と揉めるべきじゃない。先に事件を解決するべきだ。
だからこそ、神崎には今言わなければいけないことがある。
「神崎、この事件を終わらせたら、お前に話すことがある。お前のパートナーについてだ。」
「なによそんなの！今更もう…！」
「話すのは終わった後だ。ここは事件の現場で、俺たちは武偵だ。…

なら、先にやらなきゃいけないこと、あるだろ。」
うまく伝えられたのだろうか。俺もあいつもひねくれ者なせいで、互いに誤解を提示して、それを互いに曲解し、理解したつもりになっている。こんな些事一つでさえ、こいつに伝えるとなると自信が無い。
だが、だからこそ、今度こそはちゃんと話す。そうしろと、ルームメイトに言われたのだ。
「…分かったわ。ならさっさとこの事件を解決する。それでママを、安心させるんだ。」
「ああ。すまん、頼む。」
＊
遠山が走り去ってから数分くらいだろうか。
今回の起こるらしい事件について、俺が遠山に聞いた分だけではあるが説明していると、台風によって発生した乱気流に伴う進路変更と、それにより遅れる到着への謝罪アナウンスが流れた。
飛行機はゆらゆらと、とはいってもそこまでではない。ここのベッドに寝転がれば、風に揺れるハンモックと大して変わらない程度だ。ハンモックとか使ったことないからよく知らんが。
まあその程度だったのだが、どうやら進路上に雷雲が被っていたらしく、先程からせっかくの空飛ぶリゾートだというのに、部屋には雷鳴が鳴り響いている。
で、それと共鳴するように鳴り響いている物がもう一つ。
ガガン！ガガーン！
ガタッ！ガタガタッ！
「…何お前、雷怖いの？」
先程から雷が光ったり鳴ったりするたびに神崎の座っている椅子の方でガタガタと物音が聞こえるのである。なんならさっきはキャッとかいう悲鳴まで聞こえた。
「こ、怖くない！こんなのへっちゃら。」
ええ～？ほんとにござるか～？
まあ、確かに先程から座席はそっぽを向いており、その表情を伺い

知ることは出来ない。が、その強がるようで少し震えた、声色から今の神崎の心境はありありと見て取れる。
　めんどくせぇなこいつ、とつくづく思う。俺も大概面倒な人種だという自覚はあるが、こいつとはまたベクトルが違う。何というか、こいつは分かりやすく面倒臭い。
　一言で言うならば我儘とか強情とかだろうか。自分勝手に物事を進め、それに逆らえばすぐに機嫌が悪くなる。反抗期の中学生かよ、お前。もっと素直になる練習しとかないとそのうち俺みたいになるぞ。
　と、そんなことを考えながら手元にあったリモコンで機内のテレビをつける。
「ならいいけどな…。」
　急に俺がテレビをつけたことを訝しんだのか、視界の隅では座席から振り返ってこちらを見ている。俺はお前が俺を見てるのを見たぞ！
　適当にチャンネルを回していると、ふと一つの番組が目に付く。時代劇、中でもひときわ有名な遠山の金さんだ。前々から語感が遠山に似てるなぁ…、なんか関係あんのかなぁ…。と思いつつ忘れていた。せっかくだしこれでも見ようかしら…。
　そう思いつつ、本来の目的のためにどんどんと音量を上げていく。それはもうこの部屋の外にまでこの名奉行を届けんと言わんばかりにどんどんと、である。
　最大設定の八割ほどで、流石に神崎が声をかけてくる。
「ちょ、ちょっと！音おっきすぎよ！何考えてんの！」
「え？何？テレビの音で聞こえん。」
　俺がそういうと、神崎はついに座席から立ち上がり、俺の耳元で叫ぶ。
「テレビが！うるさいって！言ってんのよ!!」
　いやマジそれな。ここまで音でかいと流石の俺もちょっとイラっとするレベルの音量。ちょっとした衣擦れ音とかならまだ良いが、チャンバラの音とかは耳に刺さるような感覚だ。そんな拷問の上に、

更に神崎に耳元で叫ばれたとあっては、かしこいかわいいハチーチカな俺も、思わずおうちかえる！とか言い出したくなる。
とはいえここまでやったのだから、最後までやらせてもらおう。私、負けない！と本気モード全開でここからどういう行動を取れば神崎が大人しく言うことを聞いてくれるかを考える。でも流石にここまで音がでかいと耐え難くなってきたのでつぎの一撃で決めたい…。
「俺はこれくらいの音量で観るのが好きなんだよ。嫌ならベッドにでもくるまって音聞こえないようにしてろ。」
そんな俺の言葉を聞いて、話にならないと判断したのか神崎は俺の手からリモコンをひったくってテレビを消す。
眦をつり上げ、犬歯をむいている。あたしの部屋で好き勝手して、もう風穴程度では済まさないわよ！というような表情である。
が、テレビの音が消えた部屋にも、まだ響き渡る音は残っていた。
ガガーン！ガガーン！
鳴り響く雷鳴に、先の表情はどこへやら、神崎は首をすくめて今にも泣きそうな顔でリモコンを取り落とす。
おっ！落ちてんじゃーん。落としたんだよなぁ…。
そんなことを考えつつリモコンをゲットした俺は、勝手にもう一度テレビをつける。
部屋にはもう一度爆音でチャンバラ劇が流れ始める。しかし先程の様にそれを止める手はなく、ふと見やれば神崎は大人しくベッドにくるまりながらテレビを見ていた。
「…それでもうるさかったら言え。多少下げる。」
神崎は俺の言う通りに動いてしまったことが癪なのか、不服そうな顔で睨みつけてはくるものの、特に何も言ってくることはなかった。
そんなことをしている間に俺の耳も多少はこの音量に慣れ、床に座り込みながら俺も時代劇を楽しんでいた。
二人何を話すわけでもないこの時間は、武偵という普通からかけ離れた日々と比べあまりに日常的すぎて、あるいは夢でも見ているのではないかとすら思える。もしも俺も彼女も武偵の道に進んでいなかったら、それでどこかで出会っていたら、こんな時間もあったのだ

ろうか。そんなありえない世界を想像し、ふと神崎を見やれば、もう既に雷のことは忘れたのか、夢中でテレビに見入っていた。

…いやなんか緊張してきたな。そんなつもりはなかったのだが、想像してしまうとなんだかここが彼女の私室ではないと分かっていても意識してしまう。落ち着け俺、俺はかしこいかわいいハチーチカ。初ライブでの緊張に比べればこの程度造作もないはず…。でも俺スクールアイドルじゃないから普通に緊張しちゃう！汗とかかいてないかしら。…うーん、手汗以外は多分セーフ。でも勝手に意識しまくって手汗かいてる時点でキモさ的には十二分にアウトなので見つかったら風穴必至！これから私、どうなっちゃうの～!?

自らのキモさを再確認していると、ボフッという音と共になにやら後頭部に柔らかな衝撃を感じる。

後ろを見ると、どうやら枕を投げたらしい神崎が、毛布にくるまってカオナシみたいになったまま先ほどまで自分が座っていた座席を指さしていた。

神崎の仏頂面から察するに、「あんたが押し掛けてきたんだから別にあんたをお客さんとして扱う義理はないけど、それでもずっと床に座らせておくのは貴族のすることじゃないから、本当に渋々嫌々苦渋の選択として誠に遺憾ながらあんたが座席に座ることを許可してあげなくもないわ！さっさと座りなさい！」ということのようだった。

…いやなにこれテレパシー？あいつの考えてること鮮明に伝わってきたんだけど今。いやしかし便利であるこの機能。これからは神崎の機嫌が悪い時にいち早く気付き、すぐにその場から離脱できるかもしれない。まあ離脱しようとするともっと機嫌悪くなるんだけどね。エンカウントした時点でゲームオーバーとか、それなんてクソゲ？

俺が首を横に振り、床で良いですとアピールすると、神崎は全く同じ動きをして座りなさいと目で告げてくる。そんなことを何回か繰り返す。爆音で時代劇を流しながら、某有名映画の木霊の様に二人して首を振っている様は、はたから見れば狂気以外の何物でもなかっただろう。

そんな二人の言葉のないやりとりは、テレビと雷の音の隙間を縫うように響いた、二つの銃声によって中断される。
俺はテレビもそのままに、すぐさま部屋を出た。
部屋を出ると、通路は大混乱となっていた。個室などの関係で人が少なかったのが幸いだが、それでも十二の個室の乗客全員に数人のアテンダントが皆一様にここに集まれば、こんな騒動も起きるだろう。
銃声は機体の前方から聞こえた。人の隙間を抜け、一人機体前方へと向かう。
機体前方では、コックピットの扉から先程のビビり散らかしていたアテンダントが出てくるところだった。それだけならまあ見逃しても問題はないのだが、そのアテンダントは恐らく機長と副操縦士だろうか、ぐったりとした様子の男二人をズルズルと引きずっている。
俺はすぐさま能力を発動し、接近する。
だが近付くよりも前に、そのアテンダントは確かにこちらを見据え、嘲笑するように告げる。
「Ａｔｔｅｎｔｉｏｎ　ｐｌｅａｓｅ．で、やがります。」
直後アテンダントは胸元から取り出した缶をこちらの足元に投げつける。ガス缶…!?
「全員近くの部屋に入りドアを閉めろ！決して開けるな！」
すぐさま能力を解除、先程の通路に屯っている乗客たちにすぐさま部屋に戻るよう叫びながら、全員入ったのを確認し、俺自身も素早く部屋に戻る。
「ッハァ！ハァ…、ハァ…。」
ドアを閉め、それにもたれかかるように座り込む。
部屋に戻るくらいもっと素早くやってくれよ。俺が死ぬだろ。冗談じゃないんだよなぁ…。
部屋に戻った直後、飛行機は大きくグラリと揺れる。バチンと音を立てて照明は消え、代わりにぼんやりと赤い非常灯が点される。
「ハチマン！大丈夫!?」
そんな様子をぼーっと眺めていると、神崎に声をかけられる。
どうやらこの部屋は神崎の部屋だったらしい。知らない人の部屋

だったらめっちゃ説明求められそうでやだなぁ…、とか考えていたが、どうやら杞憂に終わったらしい。
神崎に言われ、身体の調子を確かめる。
酸欠で多少頭がクラクラするが、それ以外は特に異常はないように思う。
「…ああ、多分、今んとこ、知らんけど。」
俺のその適当な返しに、神崎は安堵の表情を浮かべ、そしてすぐさま腰に手をあて、プンスコと怒り始める。
「なにやってんのよアンタ！あの空間に最後まで残るなんて…、もしガスが強力な物だったら即死だったのよ!?」
「…ガスを投げてたやつが機長と副操縦士をどっかに連れてくのを見たんだよ。大量虐殺が目的ならあんな面倒なことはしない。何か他に目的があるはずだ。それなら、初手で即死級のガスは投げないだろ。」
実際俺の身体にはなんの障害も発生していない。となると、恐らくあのガスはブラフだったのだろう。…完全にしてやられた。
この狡猾さ、あの特徴的な言い回し、間違いないと言っていいだろう。あれは…
「武偵殺しだ。」
俺の突拍子もない呟きに、神崎は目を見開く。
「武偵殺し…!?どういうこと?」
「俺も遠山から全部知らされてるわけじゃないから分からん。ていうか武偵殺しが出るから来いとしか聞いてねえ。」
キンジくんさぁ…。情報伝達くらいちゃんとしようよ。給料貰う権利あると思ってるの？
まああいつには今度ラーメンでも奢らせるとして、今最優先するべきは神崎の警護だろう。
武偵殺しがここに来た目的は、恐らくは神崎の殺害。俺たちが乗り込まなければ本来この飛行機に乗っている武偵は一人しかいなかったのだから、これは確実と言っていい。また、武偵殺しは今までと同じくこの飛行機をジャックしている。となると、その気になれば飛行

機を墜落させてでも目的は達成出来る。それをしないのは単に武偵殺しとしてのポリシーか何かか、それとも神崎の殺害の他にも目的があるのか…。

まあなんにしても武偵殺しの目的も不明瞭な現状では大した策を講じることは出来ない。ていうか遠山くんがここにいればこんな難しい状況にはなってなかったんですけどね！

あいつを探しに行くべきか…、しかし神崎を放置して行くのは危険だな…。どうにか神崎を安全な状況下に置けないものか…。

「なにぼーっとしてるの？分からないならさっさと行くわよ。」

俺がどうするべきかと頭を悩ませていると、後ろから声をかけられる。見れば、神崎は既に銃を抜き、臨戦態勢に入っていた。

「いや行くって…、どこに。」

「決まってるでしょ。まずはキンジと合流、そしたら武偵殺しを捕まえるの。武偵殺しのやつ…、絶対にママの裁判で証言台に立ってもらうんだから…！」

そう言うと神崎は部屋の扉を開け、さっさと進んでいく。

考えてみれば、俺よりこいつの方が強いんだから警護とかそういう話じゃない気もしてきた。むしろ俺が警護される側まである。

「…頼もしいことで。」

俺は小さくそう呟き、神崎の後を追った。